2017 年度

自己点検・評価報告書

岩手保健医療大学

Iwate University of Health and Medical Sciences

目次

Ⅰ　委員会活動報告

- 教学委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 入試委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 広報委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 学生委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 図書・情報委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- ＦＤ委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
- 実習委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
- 地域貢献・国際交流委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
- 研究委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
- 自己点検委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
- 防火・防災委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 倫理委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

Ⅱ　教育･研究年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

Ⅰ　委員会活動報告

2017 年度　教学委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：豊嶋三枝子

委　員：遠藤芳子、石井真紀子、大谷良子、齋藤禎夫、庶務：佐々木美宇（学務）

オブザーバー：濱中喜代(学部長)

2.　委員会の開催

委員会は 8 月を除き原則毎月 1 回の開催を計画し、計 11 回開催した。

4/11、5/9、6/13、7/11、9/12、10/10、11/14、12/12、1/9、2/13、3/6　以上 11 回

3.　委員会活動目標

1)　カリキュラムを申請内容にそって適正に実行する。

2)　学生の学習状況の把握と学習支援体制の整備を進める。

3)　学則に則った内規・細則・申し合わせなどの整備を進める。

4)　学務に関するシステムと学習環境を整備（試験に関すること、成績管理、講義室の機器など）する。

＜活動内容＞

委員会規程の「審議事項」をふまえて、4 月の委員会で委員会の 29 年度会議内容計画、委員の役割分担について取り決め、実行した。

4.　活動内容と点検評価

1)　カリキュラムを申請内容にそって適正に実行する。

授業・実習科目や開講時期については申請どおり実行できた。またフレッシュマン合宿も特に問題なく終了し、目標を達成できた。

今後検討すべき事柄として、1 つめは、科目の設定に改善を要する点があげられる。授業時間について、講義は 1 単位 15～30 時間を原則としているが、運用上 1 単位につき 45 時間に設定している科目が 1 科目あった（形態機能学)。形態機能学に関しては、2 名の非常勤講師が担当し、1 名が解剖学、1 名が生理学と別れて教授し、定期試験もそれぞれ行った。

そのためどちらか一方の試験で不合格となった学生の成績の出し方等で工夫を要した。この形態機能学については、それぞれ重要な科目でもあり、非常勤講師に依頼しなければならない現状でもあることから、今後 1 単位ずつ独立した科目、例えば形態機能学１、形態機能学２とし、単独科目にすることが試験や成績管理上望ましい。

２つめは、順序性の問題があげられる。1 年次前期に「ヘルスアセスメント」を設定しているが、1 年前期では形態機能学と同時並行の開講となり、学生の学習効果的にはやや問題となった。今年度は「ヘルスアセスメント」を前期後半に開講し、形態機能学が半分終了した頃に開講し、少しでも学習効果をあげるために努力をした。しかし、より一層学習効果をあげるためには、開講時期を遅くし、1 年後期に設定する方向で検討

する必要がある。

2) 学生の学習状況の把握と学習支援体制の整備を進める。

学生の学習状況については、授業のある専任教員や非常勤講師から情報をとるようにこころがけた。また、学部長の発案により、非常勤講師の授業内容と学生の受講状況の把握目的で、専任教員が授業聴講を行った。前期試験において成績不良の学生数名に対し、委員長が学生委員長と共に面接を行い、後期の学習の喚起を促した。前期の成績状況から、学習習慣のついていない学生、学習の方法がわかっていない学生の比率が高いことが明確になった。そのため学生への学習支援体制として、後期から教員３名による「自主学習会」を開催した。目的は、学習の方法がわかり、学習習慣を身に着けることである。

希望者をつのったところ、１グループ（教員２名）には 10 名の学生、もう１グループ（教員１名）には、３名の学生が参加した。支援担当教員が、授業内容の復習や国家試験問題等の資料を準備して週１回程度行った。参加した学生の効果は個々によってさまざまであり、効果について今後も経過を観察していくことが必要である。今後はできるだけ早期に学習会を設けることが望ましい。また、学生がより一層自主的に学習に取り組む環境づくりを今後も継続して考えていく必要がある。

3) 学則に則った内規・細則・申し合わせなどの整備を進める。

学則の「別に定める」と記載された事項のうち、教学関係のもので優先すべき事柄から作成を行った。今年度は、「科目等履修生規程」「既修得単位認定規程」「ゲストスピーカーに関する申し合わせ」を作成し、整備を進めた。来年度以降も既修得単位の認定、特別聴講生、研究生、外国人留学生の取り扱い、留学の取り扱いなどについて検討していくことが必要である。

4) 学務に関するシステムと学習環境を整備（試験に関すること、成績管理、講義室の機器など）する。

開学年度であり、学務担当事務職員も初めて行う業務であることから、事前に担当事務が検討した案を教学委員会において協議した。具体的には、試験実施に伴う科目責任者に対する成績評価方法に関する事前調査、定期試験時間割作成、試験実施に伴う４階への学生立ち入り禁止期間の設定、試験に伴う注意事項の周知方法、成績入力と学生への再試験科目の周知方法、その他について詳細を取り決め、システム化した。今年度は１学年のみでもあり、学生からの希望を取り入れ、再試験科目の周知については、掲示ではなく個別にメールで周知する方法をとった。今後学年が増えるにつれて、学務事務の負担が大きくなることが予測されるため、学生がいつでも自己の成績を Web 上で確認できるようなシステムの構築が必要である。

講義室の整備については、特に機器類等に問題もなく、学生・教員からのクレーム・要望はなかった。今後も充実をはかっていく。

出欠管理について今年度は、教学担当事務に非常勤講師の科目の出欠管理も依頼し、

欠席の多い学生には、事前に通達メールを発信し、周知した。これについては継続する。

5）その他

(1) 非常勤講師対応、次年度のシラバス、時間割作成等

次年度の非常勤講師依頼、シラバス・時間割作成などについて学務担当事務が主に行った。今年度のみで辞退の申し出があった非常勤講師の代わりの講師選定については、委員長が学長、学部長と相談し、選定の上、学務事務が手続きを進めた。非常勤講師への対応について、問題が生じた場合は、委員長（学部長に協力を依頼した場合もあり）が原則対応し解決した。委員会の年度計画では年度末に非常勤講師との会議を開催であったが、今年度は1学年のみであり、非常勤講師の人数も限られていること、および専任教員の授業担当者も少ないことから、今年度は開催しなかった。次年度は2学年になることもあり、種々の問題も生じる可能性があるため実施することが必要である。

(2) 入学前教育

今年度は推薦入学予定者に、業者の「入学前教育プログラムの学習ﾃｷｽﾄ」を購入してもらい自己学習を行ってもらうこととした。2月に1回来学日を設け質問・相談を受けた。来学日には3名の学生が来学した。入学前教育の学習に関しては質問・相談はなく、入学後の学習や生活等に関する相談などがあった。これについては今後も継続する。

(3) 初年次教育

次年度のフレッシュマン合宿、サマーキャンプ、キャンドルセレモニーに関して、日時内容などの大枠を検討した。フレッシュマン合宿は今年度に準ずることとし、サマーキャンプは、9月に「岩手県南青少年の家」で行うことを決定し、内容の詳細は今後検討することにした。キャンドルセレモニーは、予算等の関係もあり、学生が看護への決意を表明する会としキャンドルを使用せず学内で行うこととした。キャンドルを使用しないことから名称の変更を要することなり、学長案もふまえて検討し、2月の教授会にて〔Nursing pledge ceremony〕に決定した。詳細は今後継続して審議していくこととした。

5. 次年度に向けた課題

1）カリキュラム運用上の工夫を要する点の改善の検討
2）学生への学習支援の充実をはかる。
3）非常勤講師との懇談会の実施
4）次年度初めて実施する初年次教育のサマーキャンプ、キャンドルセレモニー（Nursing pledge ceremony に名称変更）の適正な実行
5）成績管理等、学務システムの充実
6）学則の「別に定める」事項における教学関係の規程等の作成の継続

以上

2017 年度　入試委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：清水哲郎

委　員：山本勝則、濱中喜代、豊嶋三枝子、遠藤芳子、竹本由香里、石井真紀子、松井照雄、齊藤禎夫、庶務：小笠原明香（学務）

2.　委員会の開催

委員会は 8 月を除き原則月 1 回の開催を計画し、計 11 回開催した。

4/20、5/10、6/6、7/4、9/5、10/3、11/7、12/5、1/9、2/6、3/6　以上 11 回

※実施要項作成担当者会議（随時）

3.　委員会活動目標

1)「岩手保健医療大学入学者選抜に関する規程」に基づいて平成 30 年度入学生に関する入学試験を準備し滞りなく実施する

2）入試委員会に係る規程を整備する

3）平成 31 年度入学生に関する入学試験の方法に関する検討を行う

4.　活動内容と点検・評価

1)「岩手保健医療大学入学者選抜に関する規程」に基づいて平成 30 年度入学生に関する入学試験を準備し滞りなく実施する

年間計画に基づいて、当初計画の 3 種類の試験および推薦入学の二次試験を実施した。募集要項を作成しこれに従って募集から入学手続きまで実施した。実施要項については慎重な修正を繰り返し、説明会および試験実施に叶ったものを作成した。前年度と会場が変更になったが事前準備により滞りなく実施できた。また、受験者数および合格者数は前年度とほぼ同じであった。

2）入試委員会に係る規程を整備する

新校舎で入学試験を滞りなく実施することに重点をおいて取り組んだために、委員会規程の見直しには至らなかった。第 5 条 2 に「委員長は、委員会を招集し、その議長となる」と規定しているが、議事進行は副委員長が代行している。この点について検討したが、規程の修正は必要ないと判断した。

また、入学者選抜に関する規程に修正の必要性は生じておらず、関係する規程の追加作成の必要性も生じていない。

3）平成 31 年度入学生に関する入学試験の方法に関する検討を行う

平成 31 年度入学生に関する入学試験の方法に関する検討および今後の入学試験の方法に関して検討を行った。学生募集に関してすぐ対応できる内容は主に広報に関わることであり、入試委員会としては、他大学の日程を考慮して入学試験の実施日程を決めることであった。

完成年度を目指した検討も行っているが、この件に関しては報告や評価をできる段

階にない。

5.　次年度に向けた課題

・受験者数の増加

・入試問題の作成の効率化

・完成年度後の募集・試験方法についての検討

・選抜方法の検討

以上

2017 年度　広報委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：木内千晶

委　員：鹿糠全、齊藤禎夫、大谷良子、甲斐恭子、大井慈郎、庶務：小笠原明香（学務）

オブザーバー：濱中喜代(学部長)

2.　委員会の開催

委員会は原則月 1 回の開催を計画し、計 13 回(臨時 1 回)開催した。

4/12、4/25(臨時)、5/11、6/8、7/13、8/10、9/14、10/12、11/9、12/14、1/11、2/8、3/8　以上 13 回

3.　委員会活動目標

・ 受験者獲得に直結するよう正確・丁寧・迅速な情報発信をする
・ 大学の知名度の向上をはかる
・ ブランディングの確立、他大学との差別化をはかる
・ 大学全体の広報活動への意識を醸成する
・ 受験者数 213 名 推薦 53 名（1.5 倍)、一般 160 名（1.5 倍）（入学者 88 名の場合）を目指す

4.　活動内容と点検評価

1）各種情報メディアを利用した広報

各種情報メディアを利用した広報に関して、4 月から 8 月まで委員会で審議を行ってきたが、新聞、テレビ、進学セミナー、進学情報誌、進学 web サイト等の広報に関しては、いずれも費用がかかることから、委員会として予算決議・執行を行うことが困難であることが判明した。また、これらについては、必ずしも委員全員で審議する必要性がなく、委員会で審議することで、かえって業務の進行に時間がかかるということもあった。

9 月以降、委員会の扱う事項からは除外した。

2）大学案内の企画・作製

① 大学案内（2018）は、4 月から制作を開始し、5 月写真撮影、6 月 21 日に完成した。内容、主な配布先は以下の通りである。

<u>配布先（5,000 部）</u>

高校（岩手県、秋田県、青森県、宮城県、山形県)、資料請求者、進学相談会ガイダンス、オープンキャンパス、実習施設・病院、本学学生・教職員・非常勤講師等

<u>内容（12 頁）</u>

建学の精神、看護学部の 3 つの特徴、本学で取得可能な資格・免許と卒業後のキャリアップ、カリキュラム、科目紹介（探求の基礎、早期体験実習、療養援助技術論、エンドオブライフケア論、災害看護、地域看護学実習)、学生の声、教員メッセージ、キ

ャンパスカレンダー、施設紹介、岩手保健医療大学の「3つの魅力」、学長・学部長挨拶、3つのポリシー、入試概要

② 大学案内（2019）は、本学教員に大学案内の内容に関するアンケート調査を実施し、その意見を反映させ、10月より制作準備を開始した。頁数は16頁に増量し、本学の特徴が具体的に読み手に伝わるよう内容の見直しを行った。2月写真撮影、4月末完成予定。

大学案内（2018）は、開学後のタイトなスケジュールの中でも最短で作成が出来たものと考える。大学案内(2019)は、アンケート調査から得られた意見を参考に改善を加え、トップページから流れのあるつくりに改良されると考える。大学案内の内容は、本学の特徴、独自性を紹介するものとなるため、次年度以降も大学そのものの充実をはかり、本学の魅了を打ち出していく必要がある。写真撮影は、冬は室外での撮影が困難なため、時期を検討する必要がある。

3）大学ホームページ、SNSの管理運営

大学ホームページは、2017年4月より開設した。大学の基本情報をはじめ、「受験生」「地域の方」「在学生」に対しての情報発信にも活用している。 2018年1月末までの10ヶ月で21,000人強の閲覧があった。 初年度の計画通りに運用できている。SNSについては、Facebook、Twitter、LINEの3種類を運用している。FacebookとTwitterは準備室で準備していたものを 2017年4月より 移行し、LINEは同月新たに開設した。それぞれ閲覧者層が異なっており、ターゲットに合わせて適宜情報発信を行っている。

学内の情報が広報委員会まで上がってくる仕組み作りが不十分ではあるが、概ね計画通りに運用できている。

4）オープンキャンパスの広報・企画・運営

・今年度のオープンキャンパスは、6/24（土）、7/22（土）、9/23（土）、10/29（日）大学祭同時開催、3/24（土）の計5回実施、1回の企画に教職員10名程度、ボランティア学生10名程度のスタッフを配置し運営した。

・企画内容については、初回6月に模擬授業を企画したが、午後の短時間に複数の企画が重なることで参加生徒が分散し、人数が少なく寂しい等の意見があった。その為、7月の企画より同時刻の企画を減らし、模擬授業を一旦中止、実習体験等の企画に重点を置く方針となった。

7月の企画より実習体験（ユニフォーム試着やスタンプラリーの開始、手作りグッズの配布等）を充実させ、ボランティア学生による学生生活PRや個別相談を追加し、参加者の好評を得た。

10 月の大学祭同時開催のオープンキャンパスでは、他のオープンキャンパスとは違った参加者（社会人、学資支援を考えている受験者の祖父母、近隣住民等）が来校する意義があった。

・オープンキャンパス参加者は30～60名程度/回（7月が62名で最多、その他は30名程度で推移）キャンパスツアー参加者10～16名/回程度、個別相談参加者10～16名/回程度で、半数以上の来校者が大学説明会後の実習体験や個別相談、iPad 説明等の何らか

の企画に参加していた。

・オープンキャンパスの広報活動として、5 月よりチラシ・ポスター配布を開始し、7 月開催の企画より実習体験内容等を SNS で発信する等、学生参加を促す活動を行った。

全体の運営等は、毎回企画参加協力者にアンケートを実施し、その意見を反映させることで企画内容等細かに改善策を講じ、一定のスタンダードスタイルを確立させた。

大学祭同時開催のオープンキャンパスでは、他のオープンキャンパスとは違った参加者が来校する意義があったため、次年度以降も同日開催を続行していく。

実習体験企画等の SNS アップは一定の反応がみられ効果があると判断された為、今後も継続する。

5）高校訪問の計画

・5 月～6 月 に岩手県 45 校、秋田県 4 校、計 49 校の訪問を実施し、大学案内、オープンキャンパスチラシおよびポスターを持参した（訪問対象外となった県内の全高校及び秋田・青森・宮城の一部高校には郵送とした）。推薦入学者の出身校へは推薦のお礼、入学者の様子報告、オープンキャンパスの案内を行い、他校へは開学の報告、オープンキャンパスの案内を中心に本学の周知をおこなった。推薦校についてはおおむね好意的であったが、高校によっては対応教員の反応が芳しくないなど対応の差がみられた。

・8 月に 92 校（岩手 48 校、秋田 13 校、青森 4 校、宮城 8 校、山形 18 校）の訪問を実施した。大学案内、募集要項、入試ポスターを持参し、本学受験へ向けた募集要項の説明、生徒への周知、推薦を依頼した（訪問対象外となった岩手 28 校、秋田 28 校、青森 51 校、宮城 67 校、山形 12 校 計：186 校には郵送とした）。訪問先からは入試内容だけでなく、本学の学力レベル、実習場所や災害看護などカリキュラム内容、学費・奨学金等の金銭面まで広範囲な質問がなされた。

県外の多くの高校への訪問により、広く本学を周知できたことに加え、各高校の看護系への進学の傾向や受験生へ向けた情報発信の方向性をつかむことができたと考える。高校によって対応の差があることから、次年度 4 月時点で校長変更のあった高校には「学長・学部長 による校長訪問」を実施し、その他反応の芳しくない高校についても、事前アポイントをとるなどのアプローチを含め対応策を検討していく必要がある。また、訪問担当する教職員が方向性を統一し、本学の特色・特徴の説明、質問への返答ができるよう、情報の共有をはかっていくことも重要である。

6）公開講座の広報（第 2 回以降、地域貢献・国際交流委員会に移譲）

第 1 回公開講座のチラシを委員がデザインし、盛岡市老人クラブ連合会 200 部、盛岡市福祉事業団 320 部、盛岡市老人大学 200 部、早期体験実習施設 14 施設 100 部、マリオスロード地区協議会 150 部、岩手県立大学看護学部事務 10 部、本学学生 78 部、高校（高校訪問）45 部、その他、計 1200 部を配布した。

93 名の参加があり、概ね良好な広報が出来たと考える。

5.　次年度に向けた課題

・オープンキャンパス参加者が 7 月を除いて、30 名程度で推移した。次年度は企画回数が 3 回であるため、1 回の企画に多くの参加者を募れるよう、PR 方法、広報のタイミングや回数、ノベルティグッズ、企画内容等を検討する必要がある。

・オープンキャンパスのボランティア学生の謝礼は、学長・学部長の好意に頼っていたため、次年度は対応を検討する必要がある。

・休日に開催する大学行事の教職員の労務管理の基準が定まっていなかったため、次年度は早期に必要人員を割り出し、休日に関わる広報行事の担当について、勤務負担の偏りが無いよう管理者との調整を行う必要がある。

・高校訪問は、次年度は 5 月に推薦入学者出身校への挨拶、オープンキャンパスの案内、8 月に推薦入試および一般入試の案内を予定する。学生数が増え、教職員の職務や仕事量も増加することが見込まれるため、それらを考慮した事務職員、教員の訪問担当について検討する必要がある。

・大学の知名度向上、ブランディングの確立、他大学との差別化については、1 年間の広報活動だけでは評価が難しいため、次年度以降も大学全体の広報活動への意識の醸成を行い、具体的な広報戦略を検討していく必要がある。

・広報活動の効果測定は一般的にも困難であると言われているが、数量的に評価できる到達目標を盛り込みたいという理由から、今年度は受験者数を目標に掲げた。しかし、設定した受験者数の妥当性や実現可能性については、さらなる分析根拠が必要であったと考える。大学全体として受験者数の目標値を掲げるのか否かも鑑み、広報委員会としての次年度の目標を検討する必要がある。

以上

2017 年度　学生委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：遠藤芳子

委　　員：竹本由香里、石井真紀子、作間弘美、齋藤禎夫、庶務：伊藤庸子(学務)

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2.　委員会の開催

委員会は原則月 1 回の開催を計画し、計 12 回開催した。

4/5、4/18、5/16、6/20、7/18、9/19、10/17、11/21、12/19、1/11、2/20、3/20

以上 12 回

休学届による回覧会議

3/13-14,3/26-4/2、3/28-4/2　以上 3 回

3.　委員会活動目標

1）入学時・進級時オリエンテーションの企画及び実施を行う

2）学生にかかわる支援を行う

（1）学生の身分（退学・休学・停学・除名）について教授会に審議の提案をする

（2）学生の懲戒についての規程策定を行う

（3）奨学金制度への対応を行う

（4）アドバイザー制、担任制による個人面接及び指導を行う

（5）健康管理のためのルーム 1 の整備、感染症の抗体検査及びワクチン接種の推奨、確認を行う

（6）学部長賞の策定実施を行う

3）大学生活にかかわる支援を行う

（1）昼食販売企業の斡旋を行う

（2）生活上（特に休暇中）の注意喚起を行う

4）その他

（1）今年度のみの支援として、学生自治会の創立と大学祭開催支援を実施する

4.　活動内容と点検評価

1）入学時・進級時オリエンテーションの企画及び実施を行う

(1)入学時オリエンテーション

・「履修説明」、「事務手続」、「学生生活」、「図書・情報オリエンテーション」、の 4 項目に分け、丁寧なオリエンテーションができるよう 3 日間のスケジュールで実施した。

・新入生が看護者としての第一歩を踏む心構えの 1 つとなるよう、新入生歓迎講演（石垣靖子先生「看護の道を志す後輩に伝えたいこと」）を企画、実施した。

・学生生活を始めるにあたりスムーズな導入、不安の軽減につながるよう、心理カウンセラーの講話、警察署員による防犯・護身術体験、ウエルカムアワーを実施

した。

(2)進級時オリエンテーション

・曜日による授業時間数の不足も考慮し、4 月 5 日からオリエンテーションを始め、オリエンテーションと授業を並行して行えるよう企画した。

2) 学生にかかわる支援を行う

(1) 学生の身分（退学・休学・停学・除名）について教授会に審議の提案をする。

・学生の退学 1 件、休学 1 件あり、教授会にて報告し、承認を得た。理由については、各学生のアドバイザーによるこの状況に至るまでの面接の内容を報告した。

(2) 学生の懲戒についての規程策定を行う

・「岩手保健医療大学学生の懲戒に関する規程」を作成した。教授会にて承認され、平成 29 年 4 月 1 日から施行することとなった。

(3) 奨学金制度への対応を行う

・学生の希望によって申請した結果、「日本学生支援機構」の奨学生採用は、併用（第一種と第二種）6 名、第一種のみ 17 名、第二種のみ 24 名であった。「岩手県看護職員修学資金」では、応募者 17 名であったが貸付決定 9 名、貸付不承認 8 名であった。

・希望者への説明会は 3 回実施した。

(4) アドバイザー制、担任制による個人面談及び指導を行う

・定期に 5 月と 11 月の 2 回、アドバイザーによる面談を実施した。特に気になる学生（欠席日数の多い学生、精神的に不安を訴えた学生）には、2 名の担任がそれぞれ面談を実施している。3 回目の面談は、2 月 17 日に実施した看護師国家試験模擬試験の結果を報告するとともに 4 月に実施する予定である。

・退学者 3 名、休学者 1 名、留年者 3 名。

(5) 健康管理のためのルーム 1 の整備、感染症の抗体検査及びワクチン接種の推奨、確認を行う。

① ルーム 1 の使用状況について

◆今年度の使用者数は延べ 9 名（以下の表参照）であった。

	日　付	学籍番号	氏　名	症　状	原　因	転　帰
1	?			腹痛	生理2日目	ルーム1で休養後、授業に出席
2	2017/ 6/16			腹痛	生理2日目	ルーム1で休養
3	2017/ 6/21			嘔気、嘔吐	かぜ、疲労	ルーム1で休養
4	2017/ 6/29			擦過傷、捻挫疑い	自転車乗車中の転倒	ルーム1で処置後、授業に出席
5	2017/ 7/7			倦怠感、嘔気	持病、いつもの症状	ルーム1で休養
6	2017/ 7/27			腹痛	生理痛	ルーム1にある痛み止めお渡し
7	2017/ 7/31			虫ささされ	虫ささされ	ルーム1で処置後、帰宅
8	2017/ 8/8			擦り傷	自転車乗車中の転倒	ルーム1で処置後、授業に出席
9	2017/ 10/20			嘔気、嘔吐	風邪、睡眠不足	ルーム1で処置後、帰宅

◆学生相談（心理カウンセリング）は、1 件あったが、セラフィ佐藤さんからの希望で、相談日「第一、第三木曜日　18:00～（1 名）第二土曜日 10:00～（2 名）」を月曜日～金曜日 18：00～」と 11 月より変更を行い、全学に周知した。

② ルーム 1 の整備について

◆寝具は 2 ベッド分整備した。健康管理用品は、温枕、氷枕等の備品、鎮痛剤、止痢剤、傷薬等の薬品、湿布、包帯、絆創膏等の処置用品を常備し、２か月ごとに残数のチェックを行った。

心理カウンセリング用のテーブル・椅子は今後、整備予定。

③ 感染症の抗体価検査及びワクチン接種の推奨、確認

◆4 月の健診時の検査の結果、ワクチン接種が必要な学生は流行耳下腺炎 8 名、水痘 1 名、麻疹&風疹が 5 名、B 型肝炎が 77 名であった。流行性耳下腺炎と水痘については 5～6 月に、麻疹・風疹に関してはワクチンの入手困難で 12 月に医療施設に依頼し、対象者一斉に接種を行った。B 型肝炎については、夏期休暇に入る前に接種に関する説明を行い、学生が各自医療機関にて 3 回接種を実施することとし、現時点で 3 回目の接種を始めている。

インフルエンザのワクチン接種は、11 月に大学において一斉に実施した。

◆次年度の抗体価検査は、入学前に学生自身が検査を受け、必要な場合はワクチン接種も行い、検査結果およびワクチン接種証明書を大学へ提出することに変更した。インフルエンザワクチン接種は、1 年生、2 年生の臨地実習時期を考慮し、11 月上旬に一斉接種できるよう準備を進める。

(6)　学部長賞の策定実施を行う

・「岩手保健医療大学看護学部学生表彰に係る申し合わせ事項」を作成し、教授会にて承認を得た。申し合わせに則り、「看護学部長推薦書」を作成し、教職員、学生に公募した。結果、5 名の学生が推薦された。表彰の基準であるサークル・イベント企画などの学内外の活動 に相当する学生 4 名、ボランティア・地域活性化などの社会活動 に相当する学生 1 名が学部長と学生委員会にて承認され、次年度の新学期オリエンテーション時に全学生・教職員の前で賞状と副賞を授与することとなった。

副賞は、本学のキャラクターのイラスト（作間先生画）を印刷した手ぬぐいを作成中である。

3）大学生活に係る支援を行う

(1) 昼食販売企業の斡旋を行う

・お弁当販売について市内の数か所に声がけを行ったが、人手が足りない（からあげ NAKAMURA）等の理由により、実際に販売に来たのは、パントーネ、となんカナンの 2 かであった。パントーネは、売上が芳しくなく、途中から販売中止となった。

(2) 生活上（特に休暇中）の注意喚起を行う

・8 月 10 日に夏季休暇中の諸注意事項を話した。内容は、以下の通りであった。

◆試験結果、再試について（教学委員長：豊嶋）

◆夏季休暇の過ごし方について（学部長：濱中）

◆大学の施設利用（体育館・グラウンドの用具使用含む）について（学務：齊藤禎）

◆海外渡航の手続きについて（学務：齊藤禎）

◆緊急時対応と健康管理について（防火防災・環境保全委員：齋藤)、緊急時対応ポケットマニュアルの配布

◆交通事故などと資格免許について（学生委員：竹本）

◆こうちゃのハナシ（母性看護学教員：大谷）

◆HBs に係る受診について（学生委員 R1 担当：作間）

4）その他

（1）今年度のみの支援として、学生自治会の創立と大学祭開催支援を実施する

・学生全体に自治組織の必要性を説明し、自治会役員を募った結果、会長 1 名、副会長 1 名、庶務 2 名、会計 2 名、書記 2 名の計 8 名が選出され、学生自治会が発足した。学生自治会の主な活動として、予算案や事業案の策定、各種規程の制定、大学祭開催への支援などであった。また月 1 回、自治会本部会（役員会）会議を開催している。

・大学祭については、実行委員 7 名を選出し、夏季休暇中から準備を開始した。開学年度ということもあり準備から実施、後始末の過程において教職員からの多大な協力を必要とした。

（2）看護師国家試験模試を実施する

・2 月 17 日（土）に「解剖生理学」「病態生理学」の科目別実力テストを実施した。欠席者 3 名には後日、問題冊子と解答・解説冊子を渡し、自己採点・自己学習を促した。未履修の内容も含まれていたため難易度の高い問題であったが、早い段階から国家試験の出題形式の把握につながり、解答・解説冊子も講義の予習復習に活用できるものであった。

5. 次年度に向けた課題

・看護師国家試験対策を追加する。

・学生数の増加に伴い、昼食販売企業の斡旋（からあげのなかむらの再誘致など）を行う。

・夏期休暇前の生活上の注意喚起とインフルエンザの予防接種は引き続き行う。

・学生自治会、大学祭ともに学生主体の活動を尊重しつつ、引き続き支援を行う。

・学長表彰について検討する。

以上

2017年度　図書・情報委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：山本勝則、木内千晶、大井慈郎、大﨑真、齊藤禎夫、木村ちひろ（司書）

2.　委員会の開催

委員会は8月と1月を除き原則月1回の開催を計画し、計11回（臨時1回）開催した。

4/5、4/26（臨時）、5/31、6/28、7/26、9/27、10/25、11/29、12/27、2/21、3/28

以上　11回

3.　委員会活動目標

1）図書、史料、視聴覚教材を整備する

2）図書館を円滑に運営する

3）情報ネットワークシステム、学内LANを運用・管理する

4.　活動内容と点検評価

1）図書、史料、視聴覚教材の整備

・図書や視聴覚教材の整備のために、図書・史料購入計画に基づき年5回に分け、図書選定と発注作業を行った（表参照）。

・今年度予算に対する発注済み金額：5,143千円

・発注した図書・視聴覚教材数：和書；1,334冊、洋書；120冊

・図書・視聴覚教材総数：31点

・文献検索システムの運用を開始した。

・図書館機能を充実させるための設備・備品（例：書籍返却台、DVD視聴用パソコン、検索データ印刷用プリンター、掲示板等）を整備する。

今年度の整備状況は順調であるが、前年度予算通りに整備できなかった分の積み残しについては、次年度以降で調整していく。

2）図書館の円滑な運営

(1) 規程等の整備について

図書館の円滑な運営のために、岩手保健医療大学図書館規程、岩手保健医療大学図書管理規程、岩手保健医療大学図書館利用規程、学生便覧「図書館の利用について」、を検討し、整備した。

(2) 図書館の利用促進活動

・新入生を対象に図書館の概要や利用方法等に関するオリエンテーションを行った。

・学生を対象にデータベースを活用した文献検索ガイダンスを行った。

・9月～12月まで「大学生へのヒント」というテーマで図書の展示紹介を行った。

同時に、図書館入口に設置している掲示板や本学 HP を活用して展示の広報活動を行った。

・1 月から新着図書の展示を開始し、週に 1～2 回のペースで展示する図書の入替を行った。

・昨年度の年間入館者数、貸出冊数、データベース利用数、オンラインジャーナル利用数は別表のとおりであった。

多くの教職員、学生に図書館利用を促すための工夫をしている。文献検索ガイダンスや図書館の広報活動を行った直後は、図書館の利用が増えるなどの効果が認められた。よって、次年度以降も定期的な文献検索ガイダンスや広報に努めたい。

さらに、図書館の一般公開に向けての準備を促進する必要がある。

3) 情報ネットワークシステム、学内ラン運用、管理

・ネットワークシステム管理では、業者による定期保守・点検はされていないため、学内管理担当者が月 1 回の定期点検を行っている。

・4 月導入以降ネットワークの不具合が 5 回、ファイルサーバの不具合が 6 回生じ、その都度学内管理担当者が対応するかまたはシステム会社に修理を依頼（4 回）し、復旧させた。

よって、情報ネットワークの定期管理（保守・点検）システムが必須と考える。次年度以降、ネットワーク使用者数が増加するため、情報ネットワークのオーバーワークが必至であることから、至急の対応が望まれる。

4) 情報管理・情報の保護

(1) 情報管理・保護の実際

・ 学内全体のファイアウォールにて不正アクセスの遮断と、ウイルス対策を行った。 また、本学の教職員パソコン、共用パソコンにおいてもエンドユーザーのウイルス対策を行った。

・共用パソコンについては担当者が毎月アップデートを行った。

・「教員」「職員」「学生」と学内ネットワークへのアクセス権を分けた。あわせて「総務」や「基礎看護学」など必要に応じたアクセス権の区分けも行い、不特定多数の人間が学内の機密情報にアクセスすることがないよう、情報の保護を行った。

・大学メールは、現在は教職員・在校生に 1 つずつ Gmail のアカウントを付与した。また、必要により「総務」や「公開講座」などのアカウントも作成した。教職員間のメーリングリストも作成した。

・G suite(Google for Education)は主に Google drive、Google form、Classroom を利用した。Google form 授業評価をはじめ効率的に利用できた。

・複合機（プリント・スキャン）は、全教職員が学内のいずれかの複合機でプリント・スキャンができるよう設定した。セットアップは総務部と連携して行った。

・プリンターは、情報処理室にモノクロ・カラー2 台のプリンターを設置した。利用後に使用報告書の記載を義務づけた。

・ファイルサーバは、「教員」「教職員」「学生」「全体」というフォルダごとに、アクセ

ス権を設定した。

・教職員には一台ずつパソコンが貸与されている。これらに関しては各自での管理とした。また、各自保有のパソコンのウイルス対策は、各自の責任において行うよう指導した。

情報処理室の管理・運用について今年度は問題なく経過したが、次年度以降は学生数が 2 倍になることから、一層の管理・運用に努める必要がある。

学内管理者で対応し得る情報管理や情報の保護には最大限の努力を払っている。次年度以降、引き続くウイルス対策ソフトの再契約、学生数が 2 倍になることへのネットワークシステムの強化が必須である。

学内印刷物は、現在複合機でのコピー機能を使って行われているが、手軽さ、スピード、効率、コストの面から印刷機の導入を検討すべきと考える。

G suite(Google for Education)については Google drive、Google form、Classroom およびファイルサーバの使用規程を作成・運用する必要がある。

(2) 情報教育の実際

・教職員、学生に対して情報管理と保護に関する研修を行うとともに、学内ネットワークの利用方法の説明と注意喚起を行った。

・G suite(Google for Education) - Google drive、Google form、Classroom－の利用については、前期に利用者に向けてオリエンテーションを実施した。

社会情勢として、今後さらに SNS の活用やそれに起因するトラブルの増加が考えられるため、教職員、学生に対する一層の情報教育を継続していく必要がある。

5. 次年度に向けた課題

1) 図書、資料、視聴覚教材の整備・充実

2) 図書館利用者の活性化、増加

3) 情報ネットワークシステム、学内ラン運用、情報管理の充実・整備

以上

表　　2017年度図書館統計

1. 図書館利用統計

(1)　開館日数及び入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者数	250	185	250	323	298	246	282	263	255	235	212	199	2,998
開館日数	14日	17日	21日	19日	18日	19日	19日	19日	20日	16日	18日	19日	219日

(2)　貸出冊数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学生	0	0	4	45	3	1	24	19	22	44	13	3	178
教職員	8	24	34	23	17	6	35	38	22	13	33	20	273

(3)　館内資料の文献複写利用

利用者区分	利用者数	件数
学生	8	11
教職員	15	17

(4)　相互貸借

相互貸借業務内容	受付	依頼
文献複写	10	47
図書の貸借	0	1

※8月1日より業務開始

(5)　データベース

データベース	検索件数	ログイン回数	備　考
医中誌web	2,860	1,270	
最新看護索引Web	204	258	
メディカルオンライン	745	266	H30.2までの利用統計
CINAHL	145	63	H29.10より運用開始

2. 図書、逐次刊行物、視聴覚資料の整備

（1）平成 29 年度　図書等購入実績

	和書冊数	洋書冊数	視聴覚資料点数	和書金額（円）	洋書金額（円）	視聴覚資料金額（円）
6,7 月選書	326	－	－	927,996	－	－
8,9 月選書	440	42	－	1,127,170	344,595	－
10,11 月選書	90	9	27	210,063	70,346	714,658
12,1 月選書	240	46	3	596,620	261,850	20,988
2,3 月選書	243	20	2	660,347	198,137	20,036
小　計	1,339	117	32	3,522,196	874,928	755,682
合計金額						5,152,806

※ 2,3 月選書分について、発注中のため品切れ等の理由から変更になる可能性あり

（参考 1）年度別図書購入計画　（冊）

区分	28 年度（実績）	29 年度	30 年度（見込）	28～30 年度計
和書	1,755	1,500（-161）	1,400	4,655
洋書	254	130（ -13）	120	504
計	2,009	1,630（-174）	1,520	5,159

（参考 2）図書購入基本計画と実績

区　分	基本計画		実績		備　　考
	冊数	金額（千円）	冊数	金額（千円）	
28 年度	(260) 2,610	16,469	(254) 2,009	8,649	左記の和・洋書のほか、電子ジャーナルやデータベースを購入
29 年度	(240) 2,540	8,941	(117) 1,339	8,739	左記の和・洋書のほか、電子ジャーナルやデータベースを購入
30 年度		8,977			
計	(500) 5,150	34,387			

(参考 3)28 年度および 29 年度図書館関係経費の内訳

	28 年度		29 年度		備　　考
区　分	冊数等	金　額(円)	冊数等	金　額(円)	
和書	1,755	5,529,297	1,339	3,522,196	
洋書	254	2,952,793	117	874,928	
小計	2,009	5,529,297	1,456	4,397,124	
和雑誌	18	314,330	18	271,739	
洋雑誌	3	512,199	3	412,236	
電子ジャーナル	2	295,990	2	270,068	
データベース	3	1,697,760	4	2,632,716	H29.12 より CINAHL 導入
視聴覚資料	11	299,376	31	755,682	
計	—	8,648,952	—	8,739,565	当初予算 20,2 千円余り

(2) 図書館所蔵資料総数

資料区分	和	洋	合 計	備　考
図書	4,076	331	4,407	
雑誌(学会誌等含む)	1,782	39	1,821	
電子ジャーナル	0	2	2	検索件数：25 ダウンロード数：22
視聴覚	58	0	58	

2017年度　FD委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：石井真紀子

委　員：成田真理子、佐藤恵、後藤泰輔

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は8月を除き原則月1回開催し、計11回開催した。

4/21、5/12、6/9、7/7、9/8、10/2、11/7、12/5、1/9、2/6、3/6　以上11回

3. 委員会活動目標

1) 「ケア・スピリット」の理解、共有を通して授業の中で具現化できるための研修会を開催する
2) 方針に沿った趣旨の研修会に該当する教職員を派遣する
3) 外部講師を招聘し、方針に沿ったFD・SD研修会を開催する
4) 他委員会と協同でニーズに沿ったFD・SD研修会を開催する
5) 授業評価アンケートを実施し授業内容の改善に向けたデータが提示する
6) 本学の実態に沿った体系的なFD・SDを構築するための情報収集および検討を行う

4. 活動内容と点検評価

活動目標に沿って報告する。

1) 「ケア・スピリット」の理解、共有を通して授業の中で具現化できるための研修会を開催する

5月、6月、7月の計3回開催した。第1回目は清水学長の講義をと質疑を通して教員間でケア・スピリットの理解を深められた。2回目と3回目は「ケア・スピリット」をカリキュラムの中でいかに具現化していくか、というテーマのもと、グループで討論し活発な意見交換ができた。

学生の内にある「ケア・スピリット」の涵養を教育理念に掲げている。講義の際の質疑応答やグループ討論での活発な意見交換の様子から、「ケア・スピリット」を理解しカリキュラムの中で具現化するために必要な企画であった。今年度は1学年のみの在籍であったが、学年進行にとともにカリキュラムが多様化することから、ニーズに見合った研修会の開催が今後も必要と考える。

2) 方針に沿った趣旨の研修会に該当する教職員を派遣する

4月に「看護過程に活かすシミュレーション今教育のいろは」に教員1名を派遣した。8月に「大学新任教員のための研修会」に2名の教員を派遣した。11月に「学士力の向上を目指して教育の質を上げよう」というテーマの研修会に教員1名を派遣した。研修会に参加した教員には、それぞれ伝達講習会で報告してもらい好評であった。

終了後のアンケートが好評であったことから、派遣した研修会のテーマが本学の現

状に沿ったニーズの高い内容であることが分かった。「大学新任教員のための研修会」については、大学の文化・風土を理解してもらう目的で、次年度以降も新任教員を計画的に派遣する。また新任教員以外では、本学の現状に沿った有益なテーマを選定し継続して派遣する。

3) 外部講師を招聘し、方針に沿った FD・SD 研修会を開催する

本学の FD 体制を構築するにあたり、FD マザーマップ®の導入を検討し決定した。その関連で 3 月 5 日（月）に千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 特任准教授の吉田澄恵氏を招いて FD 研修会を開催した。前半 60 分は大学改革と FD・SD の義務化や FD マザーマップ®開発の経緯と活用の仕方などについて具体的な講義をいただいた。後半 30 分は教員としてキャリア評価を行っての感想と講義を受けての意見交換の場とした。アンケートでは「これから本学がどのように FD を考え、マザーマップを活用していくのかについて、方針を考える良い機会になったと期待したい」という意見や「組織で活用していくためには、全体でディスカッションしながら、どのような目的で使用するのか、共通理解することが不可欠と考える」という意見が寄せられた。

FD マザーマップ®の導入にあたり、内容、時期ともに適切であった。今年度は FD の体制に関する研修会であったが、次年度のテーマは改めて検討することで、有意義な研修会としたい。

4) 他委員会と協同でニーズに沿った FD・SD 研修会を開催する

防火防災・環境保全委員会と合同で「一次救命（AED）講習会」を開催した。AED 設置が義務づけられている。教員のほとんどは看護職であるが、皆が長けているということでもないため、定期的な開催が求められる。事務職員にとっても有意義な研修会であった。

今年度の共同開催は上記 1 つのみであった。次年度は年度当初から全委員会に呼びかけ、開催する必要がある。

※1)～4)に該当する研修会一覧を別紙に示す（資料 1）。

5) 授業評価アンケートを実施し授業内容の改善に向けたデータが提示する

臨地実習と演習科目（基礎ゼミナール）以外の全開講科目について、授業評価アンケートを実施した。前期分については結果をまとめホームページ上に公開した（資料 2）。後期分は集計を終えまとめの段階にある。

少人数のメンバーで協力し合い、予定通り授業評価アンケートを実施できた。次年度も同様に実施する。

6) 本学の実態に沿った体系的な FD・SD を構築するための情報収集および検討を行う

研修会終了後のアンケートで教職員の研修会に対するニーズを把握した。それをもとに本学では今何が必要か分析することについては不十分であった、

FD・SD 研修会の開催には情報収集と本学の現状に合わせた分析が不可欠である。これについては、全ての活動目標に反映されるため次年度は十分に行いたい。

7) その他

若手教員を対象とした、オンライン講座（東京大学配信）を 7 月 4 日（火）～12 月 27 日（水）にかけて 19 回開催した。テーマは「インタラクティブ・ティーチング」であり、アクティブ・ラーニングや学習者の心理、クラスデザイン、シラバスの書き方等、特に新任教員に有意義で活用の可能性が高い内容であった。アンケートでは「大学教育において旬な話題を学べた」「授業デザインや技法が活かせる」といった内容に関する意見や「動画配信されているのでいつでも受講できる」といった形態に関する意見が寄せられた。また「堅苦しくなくリラックスしながら参加できた」という意見があり、長期間の研修会を継続させるための委員の工夫が評価されていた。最終日には参加の証明として学長より修了証を授与した。

好評であったことと次年度も新たな教員が着任する予定から、特に若手教員向けに開講する予定である。

5. 次年度に向けた課題

1) 下記の内容について FD・SD の視点で本学の現状を分析しニーズに合った研修会を開催する。

(1) 「ケア・スピリット」を学生の内に涵養するための教育方法

(2) 各委員会で希望する研修会の開催支援（もしくは共同開催）

(3) 外部で開催の研修会への教職員の派遣

2) FD マザーマップ®の活用

資料 1

平成 29 年度 FD・SD 研修会 一覧

回	月日	場所	内容	担当	出席率
1	4月26日(水) 14:40～16:10	地域交流室	FD・SD①（防火・防災環境保全委員会との共同開催）一次救命（AED）講習会	齋藤（史）	87.5%
2	5月18日(木) 17:30～18:30	講義室 1	FD① 講義「ケア・スピリットについて」	清水	94.0%
3	6月20日(火) 16:00～17:00	演習室 1・2	FD② グループワーク「教員の立場で『ケア・スピリット』について考える」	FD 委員会	100.0%
4	7月27日(木) 15:00～16:30	演習室 1・2	FD③ グループワーク「カリキュラムの中で『ケア・スピリット』をいかに具現化していくか」	FD 委員会	88.2%
5	9月26日(火) 13:30～15:00	実習室 1 （ｼﾐｭﾚｰｼｮﾝﾙｰﾑ）	FD④ 看護過程に活かすシナリオシミュレーションのいろは	作間	81.3%
6	10 月 25 日（水） 16:00～16:30	講義室 3	FD⑤ 伝達講習「大学新任教員のための研修会」	齋藤（史） 成田	43.8%
7	12 月 18 日（月） 16:00～16:40	講義室 3	FD・SD② 伝達講習 1. 学士力の向上を目指して教育の質を上げよう！研修会 2. 学生生活にかかるリスクの把握と対応に関するセミナー	石井 濵中、遠藤	62.1%
8	3 月 5 日（月） 13:30～15:00	講義室 1	FD⑥ 講演会「教員の能力向上・キャリア形成のためのマザーマップ導入による本学の FD 体制の構築（仮）」 講師：吉田澄恵 先生（千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター特任准教授）	FD 委員会	88.2%
9	7 月 4 日（火）～12 月 27 日（水） （32 回分を 19 回に分けて開催）	講義室 3	若手教員を対象とした東大オンライン講座(32 回シリーズ) ―インタラクティブ・ティーチング―	FD 委員会	受講希望者 9 名で開催

資料2

平成29年度前期　学生を対象とした授業評価アンケート 結果

岩手保健医療大学では、授業内容の精選・改善により本学全体の教育の質の向上を図る目的で、学生を対象に下記の要領で授業評価アンケートを実施した。

1. 対象科目：平成29年度前期に開講した全科目（演習・実習科目を除く）
   1) 基礎科目（6科目）
      探求の基礎、情報処理、対人コミュニケーション、人間と心理、地域の文化、暮らしの科学
   2) 専門基礎科目（6科目）
      自然科学、環境生態学、生化学、形態機能学（解剖学）、形態機能学（生理学）、ヘルスアセスメント
   3) 専門科目（2科目）
      看護学概論、基礎看護援助論

2. 実施日時
   各科目の授業最終回の終了5分前（期末試験の前）

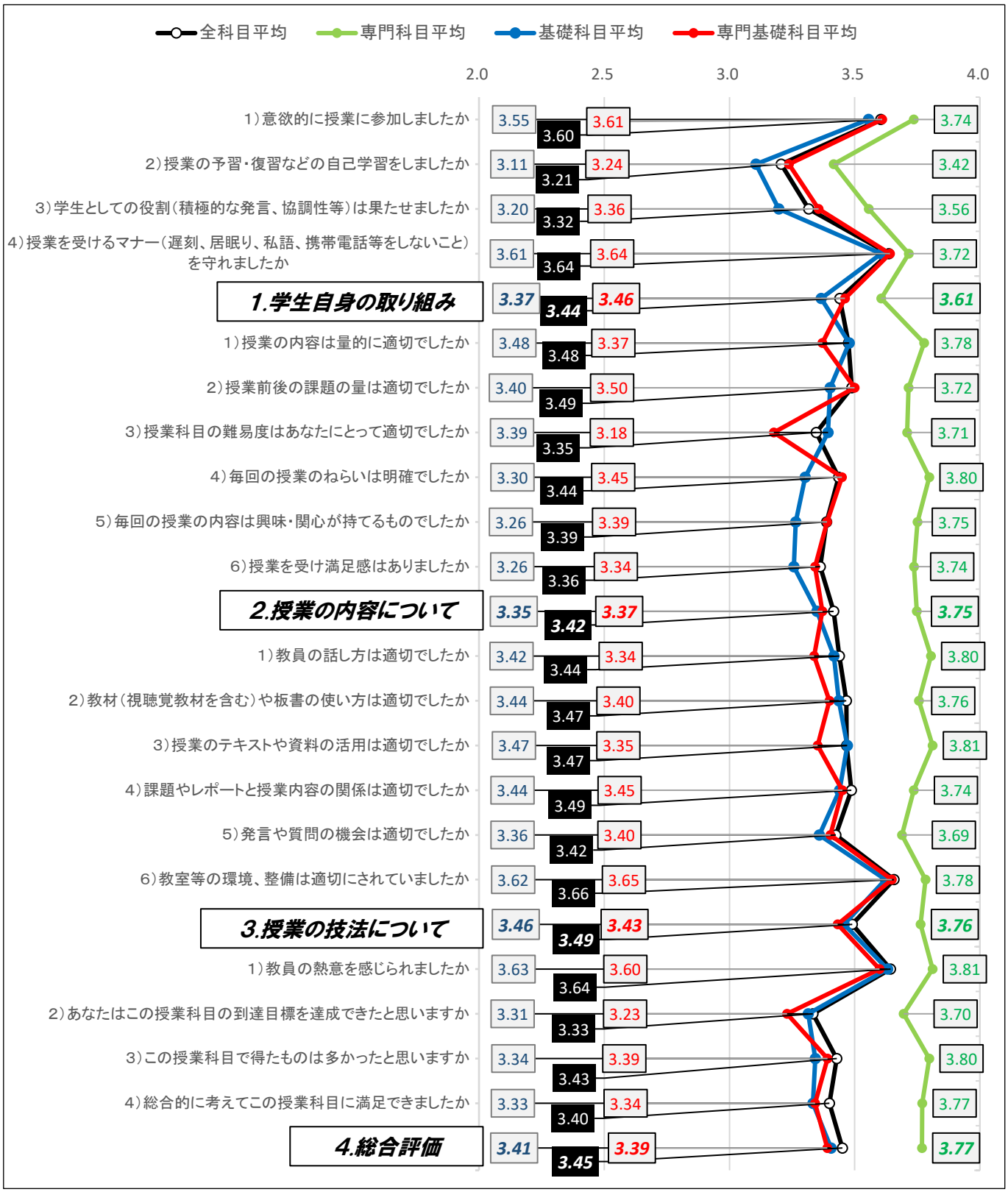
3. 方法
   1) アンケート内容（別紙参照）
      (1) 学生自身の取り組み（授業に臨む姿勢や態度、自己学習、授業を受けるマナー、など）4項目
      (2) 授業の内容（量、難易度、満足感、など）6項目
      (3) 授業の技法（教員の話し方、教材、資料、板書、など）6項目
      (4) 総合評価（教員の熱意、到達目標の達成具合、授業に対する満足感、など）4項目
      (5) この授業を履修してよかった点とその理由（自由記述）
      (6) この授業を履修して改善してほしい点とその理由（自由記述）
      ※(1)～(4)については4段階評定（4：はい、1：いいえ、その中間に2と3を設ける）で回答を求めた。
   2) アンケートの配布・回答・回収はGoogle Formsで行った。

4.　結果

14 科目全体の回答率は 88.0～100.0%であった。

各設問は 1～4 点の範囲で点数化し、全体（全科目）と分野別（基礎科目、専門基礎科目、専門科目）に平均点を算出した。点数が高い方が学生からの評価が良いことを示す。

図　全体-科目分野別平均



5. まとめ

回答率が88.0%～100.0%の範囲で高かったのは、Google Formsを使用することで学生が回答しやすかったためと考える。

分野別では、基礎科目や専門基礎科目と比較して専門科目の評価が全般的に高かった。専門科目は学生にとっては将来に直結する興味ある内容であり、そのため評価が高かったものと考える。

「学生自身の取組み（4項目）」では、「意欲的に授業に参加しましたか」と「マナーを守れましたか」は比較的得点が高かった（全科目平均：3.60点、3.64点）が、「授業の予習・復習などの自己学習をしましたか」は24項目中、最も低かった（全科目平均3.21点）。学生は、マナーを守り授業に意欲的に参加しているという自覚はあるが、事前・事後学習が十分とは認識していないことが分かった。学年の進行とともにカリキュラムが密になり学修内容・量ともに増えることは明らかであるため、時間外の学修に主体的に取り組めるよう、教育方法の検討が課題である。

「授業内容について」では、「授業科目の難易度はあなたにとって適切でしたか」の点数が専門基礎科目で 3.18 点と低かった。専門基礎科目は高校で既習の化学や生物で培われた基礎学力が内容の理解に影響すると考える。既に実施している入学前教育の検討も考慮しながら学生の苦手意識を緩和する方向での検討が必要と考える。

「授業の技法について」の「教室等の環境、整備は適切にされていましたか」が全般的に高かった（全科目平均3.66点）。新設大学ということもあり、環境に対する評価は概ね良好であった。

「総合評価」では、「教員の熱意を感じられましたか」が高かった（全科目平均3.64点）。学生は授業に対する教員の熱意をくみ取っていることが分かった。

引き続き後期も授業評価アンケートを実施する。

またGoogle Formsは紙媒体と比較して配布や回収、集計が瞬時に行われるため、担当者にとっても負担の少ない方法であり、今後もこの方法を継続する予定である。

2017 年度　実習委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：山本勝則、木内千晶、作間弘美、齋藤史枝、甲斐恭子、　庶務：佐々木美宇（学務）

2.　委員会開催状況

委員会は原則月 1 回の開催を計画し、計 10 回開催した。

5/10、6/14、7/12、8/9、9/13、10/11、11/8、12/13、2/14、3/14　以上 10 回

3.　委員会活動目標

1)　臨地実習の計画、運営、評価を行う
2)　臨地実習施設の開拓、委嘱を行う
3)　臨地実習の学生配分を検討する
4)　臨地実習中の事故および感染等の対応・対策を検討する
5)　臨地実習の教育内容、単位等の見直し、再編、将来計画を策定する
6)　実習指導者会議を開催し運営する
7)　臨地実習指導者および指導教員の研修を行う
8)　その他

4.　活動内容と点検評価

1)　臨地実習の計画、運営、評価を以下のとおり行った。

＜2017 年度早期体験実習の実施・評価＞

臨地実習に関する教員オリエンテーション：4 月 25 日、15～16 時、 1Ｆ会議室

臨地実習に関する学生オリエンテーション：5 月 19 日、9～11 時、第 1 講義室

教員反省会：7 月 10 日、16 時 30 分～17 時 30 分、 1Ｆ 会議室

早期体験実習については全学生が受講し、合格となった。

＜2017 年度生活援助実習の実施・評価＞

生活援助実習に関する教員オリエンテーション：9 月 19 日、14～15 時、4F 演習室

生活援助実習に関する学生オリエンテーション：12 月 19 日、13～15 時、第 1 講義室

教員反省会：特に開催なし

生活援助実習では 2 名の学生が病欠 2 日（インフルエンザ）と 3 日（感染性胃腸炎）、1 名男子学生が雪道で自転車転倒自損事故があった。これらについては逐次実習担当教員から、基礎看護学領域担当教員へ、ついで学部長に報告があった。しかし、学長、実習委員長への報告はされなかった。ヒヤリ・ハット・アクシデントの報告ルートについては再検討が必要である。

＜2018 年度早期体験実習の実施予定＞

臨地実習：2018 年 5 月 14 日～18 日

＜2018 年度生活援助実習の実施予定＞

臨地実習：2019 年 1 月 28 日～2 月 8 日

＜2018 年度療養援助実習Ⅰの実施予定＞

臨地実習：2018 年 5 月 21 日～6 月 1 日

＜2018 年度療養援助実習Ⅱの実施予定＞

臨地実習：2018 年 12 月 10 日～12 月 21 日

次年度実習に向けての準備は順調に進められている。

2) 臨地実習施設の開拓、委嘱を行った。

＜2017 年度早期体験実習施設＞

病院：6　施設：10

＜2017 年度生活援助実習施設＞

病院：9

＜2018 年度早期体験実習施設＞

病院：6　施設 10

＜2018 年度生活援助実習施設＞

病院：9

＜2018 年度療養援助実習Ⅰ施設＞

病院：8

＜2018 年度療養援助実習Ⅱ施設＞

病院：8

3) 臨地実習の学生配分を検討した。

2017 年度早期体験実習、生活援助実習とも基礎看護学領域中心に、学生の現住所を参考に学生の配分を決定した。経済的負担感についての学生からの意見があるため、検討する余地あり。まずは実態調査を計画した。

次年度の療養援助実習Ⅰ、療養援助実習Ⅱについては、成人看護学領域、高齢者看護学領域を中心に学生のグループを立案する予定である。

4) 臨地実習中の事故および感染等の対応・対策を再検討する。

2017 年度実習要項に掲載済み。生活援助実習において、学生の自転車転倒事故が発生したが、大学に看護学部長が待機していたため、対応に問題はなかった。しかし、今年度は担当領域の長および実習委員長が臨地において実習指導に当たっていたことから、連絡網から外れてしまった。ヒヤリ・ハット・アクシデントの報告ルートの見直しあるいは徹底が必要である。

5) 臨地実習の教育内容、単位等の見直し、再編、将来計画を策定する。

本年度は、実習が開始したばかりであることから、見直しには至らなかった。

しかし、生活援助実習の時期については検討の余地があることを確認した（後期日程の授業が終了したのちの 2 月半ばから実習を開始する案）。

また、2018 年度の療養援助実習Ⅰ、療養援助実習Ⅱについては、学生総数に伴い 14 グループを 13 グループとすることを検討する。

(6)　2017 年度実習指導者会議を開催し運営した。

2018 年 3 月 7 日、15～16 時 30 分、第 1 講義室にて開催した。

病院・施設参加者、23 施設、46 名（当日欠席者 4 名）、本学教職員 16 名、計 58 名の出席を得た。本年度実習報告、次年度実習説明を中心に、顔合わせと臨地実習教育を中心に討議し、理解を共有した。

7)　臨地実習指導者および指導教員の研修を行う。

本年度においては、実施はしなかった。次年度は大学での教育経験のない助手 3 名が雇用されるため、随時計画する予定である。

5.　次年度に向けた課題

(1)　臨地実習の計画、運営、評価

・次々年度に始まる領域別実習の計画、内容の具体化

(2)　臨地実習施設の開拓、委嘱

・次々年度に始まる領域別実習の施設開拓と契約の締結

(3)　臨地実習の学生配分の検討

・早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱの学生配分の検討

・次々年度に始まる領域別実習の学生配分の検討

・教育的・経済的公正、公平な学生配分法の検討

(4)　臨地実習指導者および指導教員の研修

・新任教員、臨床実習指導者に対する研修

・臨地における新任教員の実習指導体制の支援

以上

2017 年度　地域貢献・国際交流委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：竹本由香里

委　員：大谷良子、甲斐恭子、作間弘美、庶務：七尾明恵（総務）

オブザーバー：清水哲郎(学長)、濱中喜代(学部長)

2.　委員会の開催

委員会は 8 月を除き原則月 1 回の開催を計画し、計 11 回開催した。

4/12、5/12、6/9、7/7、9/8、10/13、11/8、12/8、1/11、2/9、3/9　以上 11 回

3.　委員会活動目標

1）大学施設の使用案内を整備する。

2）地域貢献活動として、公開講座を年 2 回開催する（広報委員会と協同)。

3）地域貢献活動、国際交流についての活動方針を検討する。

4.　活動内容と点検評価

1）大学施設の使用案内を整備する。

・近隣施設の使用料等を参考に、各施設・備品の使用料を検討し、「岩手保健医療大学施設使用案内」を作成した。あわせて「岩手保健医療大学施設使用料についての申し合わせ」を作成し、本学教員が本学施設を使用する場合の使用料と手続きについても整備した。

・今年度の学外からの施設利用申し込みは 12 件、不許可 2 件を除く 10 件の貸出しがあり、そのうち本学教員が申込者となったものは 3 件であった。

・地域交流室の管理運営については、地域貢献事業企画書を作成して学内教員から企画の募集を行った。平成 29 年度は、地域交流室において清水学長による「学長が担当する医療・ケア従事者との懇話会」が 4 回開催された。

・地域交流室に共通で使用できる電気ポット、ごみ箱等の物品を購入し、環境を整えた。

・大学施設の使用案内等の整備については達成することができたが、地域交流室の活用については、地域の方との交流の場としてどのような活用方法があるのかを引き続き検討していくことが課題である。

2）地域貢献活動として、公開講座を年 2 回開催する（広報委員会と協働)。

・一般市民向け公開講座として平成 29 年 6 月 3 日（土）に「《老活》のすすめ　－最期まで自分らしく生きるために－」（講師：清水学長）を開催した。参加人数は 93 名で、87 名からアンケートを回収できた（回収率 93.5%)。参加者の 56%は 50～60 歳代であり、74%は盛岡市内からの参加であった（別紙資料 1)。

・一般市民向け公開講座の広報活動は、広報委員会においてチラシを作成し、盛岡市

老人クラブ連合会、盛岡市役所、マリオスロード地区協議会、本学学生等を通してチラシを配布した。

・看護等医療従事者向け公開講座として平成 29 年 10 月 14 日（土）に「本人・家族の意思決定支援とアドバンス・ケア・プランニング」（講師：清水学長）を開催した。参加人数は 85 名で、78 名からアンケートを回収できた（回収率 91.8%）。参加者の職種は 78%が看護師と最も多く、73%は医療機関に従事していた。盛岡市内からの参加者は 50%であり、青森県、宮城県などの県外からの参加者もあった（別紙資料 2）。

・看護等医療従事者向け公開講座の広報活動は、地域貢献・国際交流委員会においてチラシを作成し、岩手県内の医療機関、看護系教育機関、実習施設等 87 施設に案内を送付した。

・医療従事者向け公開講座は予約制としていたが、申込み後に参加の可否につて返信をしていなかったことから、問い合わせが数件あった。今後は、参加可能な場合は特に連絡をしないなどの注意書きを申込書に明記するなど、改善が必要であった。

・開学 1 年目の公開講座であったが、2 回とも 80 名を超す参加者があった。一般市民向け公開講座では、講演内容の対象となる年齢層にあてた広報活動が効果的であったと考えられる。医療従事者向け公開講座でも、関係施設の勤務表作成時期を考慮し、早めに案内を送付できたことで参加者を集めることができた。

・公開講座当日の運営は、地域貢献・国際交流委員と広報委員、事務職員により行った。今年度は講演形式の公開講座であったため、人員が不足することはなかったが、内容によっては委員以外の教職員にも協力を得る必要が出てくると考える。

3）地域貢献活動、国際交流についての活動方針を検討する。

・生涯学習（講座その他の学習活動）に関すること、高大連携等に関することとして、出前講義について検討し、「岩手保健医療大学出前講義実施要項」を作成した。出前講義の内容については、教授・准教授・講師・助教の各教員から講義可能なテーマを提出してもらい、大学ホームページに掲載した。

・今年度は高校訪問時に出前講義の依頼があり、委員会で講師を検討して対応した（一関修紅高等学校、齋藤助教に講師を依頼）。

・医療従事者向け公開講座の後に医療機関からの出前講義の依頼が 1 件あり、作成した実施要項に沿って申し込みをしていただいた（岩手県立二戸病院、希望講師は清水学長）。

・今年度の出前講義の件数は 2 件であり、来年度は、高校訪問等でも出前講義について周知していただき、出前講義の件数を増やしていきたい（高校からの依頼 1 件、病院からの依頼 1 件）。

・国際交流については、国際交流の在り方について意見交換を行った。海外研修や外国人との交流だけではなく、学生の国際的な視野を広げるための支援も国際交流として位置づけられるとの意見から、来年度に海外研修の経験のある教員による講演会を企画することとした。

5.　次年度に向けた課題

1）出前講義の推進

出前講義を推進していくにあたり、他大学の高大連携の状況なども情報収集しながら、相手側にとって本学の出前講義をどのように活用してもらえるのかについて検討していく。また、対象を高校生に限らず、小・中学生に拡大していくための方策も検討していくことが必要である。出前講義は地域貢献活動の一環ではあるが、本学の教育内容を知ってもらう機会でもあるため、広報委員会等とも連携しながら推進していきたい。

2）国際交流についての検討

次年度に海外研修の経験のある教員による講演会を企画すること計画しているが、引き続き他大学の状況などを情報収集しながら、本学における国際交流に関する具体的な活動を検討し実施に移していく。

3）公開講座の企画運営

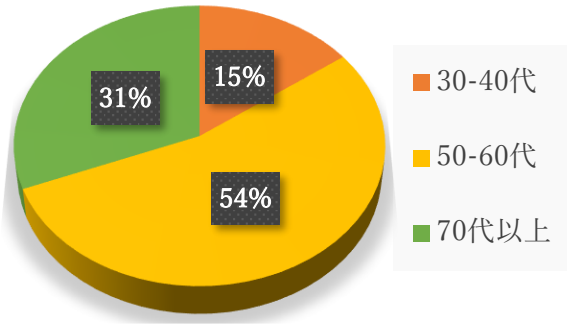
次年度も一般市民向け・医療従事者向けの 2 回の公開講座を企画している。テーマ、講師を早めに決定し、今年度同様に対象者に合わせた広報活動を行い、参加者を募る。公開講座の担当については、輪番制として企画することを検討していく。また、運営面では講座の内容、他の行事スケジュール等を考慮しながら人員を確保し、参加者に満足してもらえるような準備、運営を行っていく。

以上

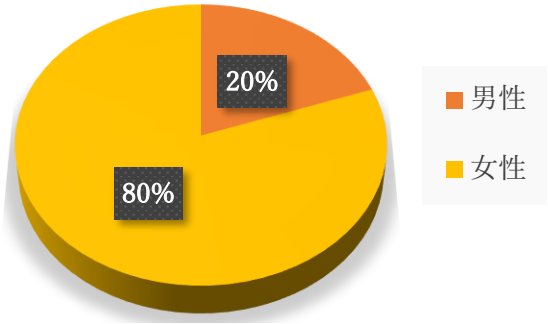
2017 年度第 1 回 公開講座アンケート結果

※ 参加人数 93名 アンケート回収数87枚 回収率93．5%

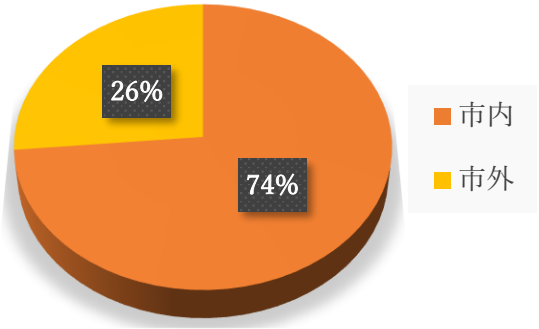
1．年齢



2．性別

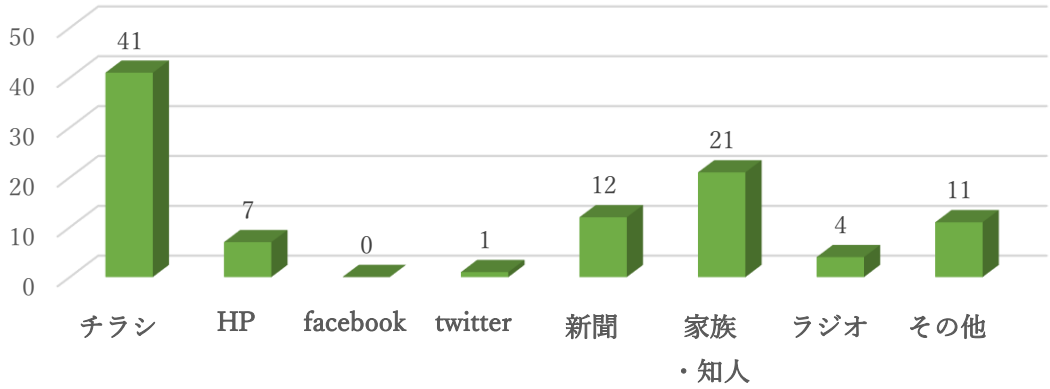


3．居住地



※市外：滝沢 7、矢巾 4、花巻 3、岩手町 2、
紫波1、八幡平1、雫石1、秋田 2、
県外1 他

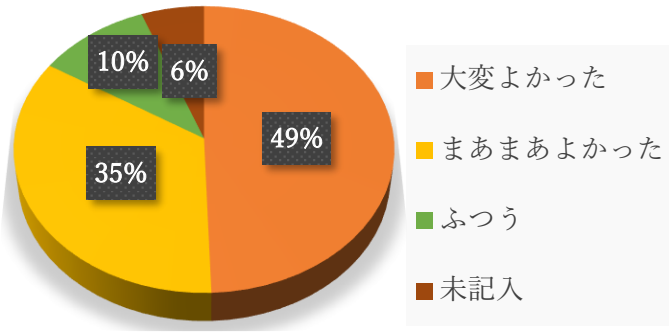
4．公開講座をどこで知りましたか（複数回答）



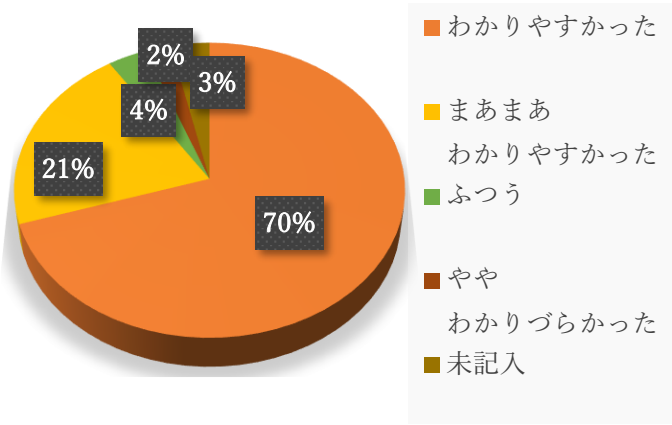
※チラシ入手先：職場、公民館、学校、図書館、老人大学、
マリオス、県老連、在学生 他

※その他：職場 他

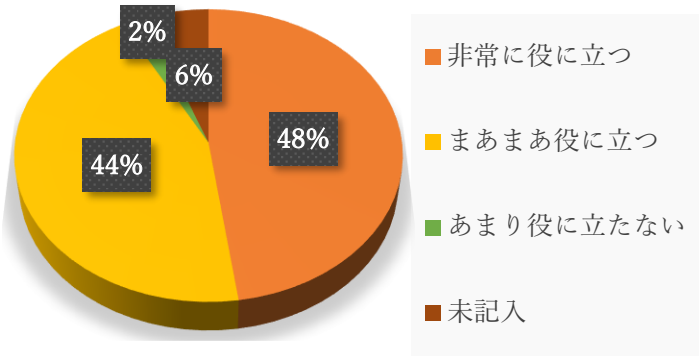
5. 公開講座はいかがでしたか



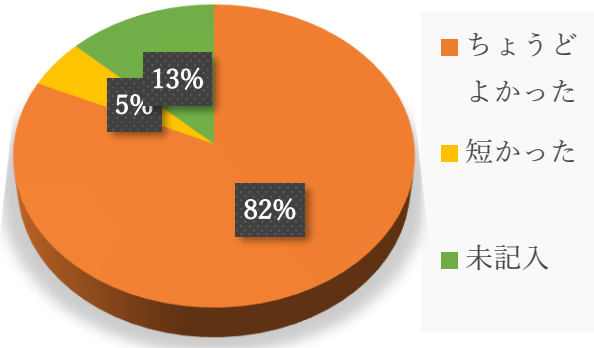
6. 講演はわかりやすかったですか



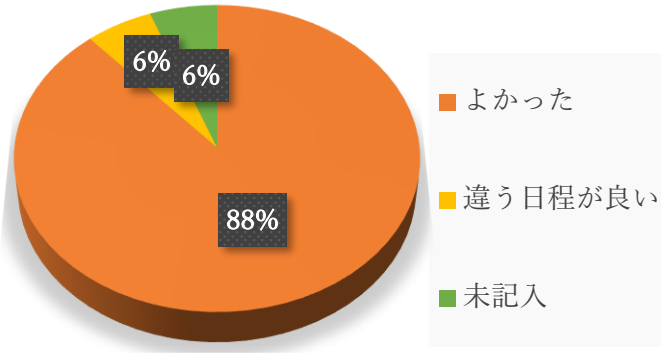
7. 講演内容はあなたに役立つものでしたか



8. 開催時間について



9. 開催日程について



※希望日：平日 18 時、土曜 11-12 時、
平日 13-14 時、

10. 自由記載（42 名）

<感想>

・人生についての自分らしさのことについてもっと聞きたかった。学長ということで少し緊張したが、そうではなかった。これから役立つものだと思う。ただ流れに逆らうことなく生きてきたが、学長先生は 70 歳になられても現役で参加された方々も前向きに学びに来た方々。これから私も長生き：長く息しているだけでなく健康でもっと働きます（68 才男性）。

・私は医療に携わるものです。患者の家族が思っている生の声が聞けて、今後も医療者としてのかかわり方を大切にしていきたいと思った。

・もっといろいろ聞きたかった。講義が楽しかった。

・開学早々このような講座を設けていただいたことに感謝します。大学のご発展をお祈りします。

・不安なことばかり頭を巡るが、まずは心つもりノートを記してみようと思う。老活をいかに充実して楽しく過ごしていけるかは自分の気持ち次第かもしれない。参加してよかった。ありがとうございました。

・終活と老活同じような感じを受けた。情報を伝えることは大事だが解決策の提示がないのがもったいないと思った。最初の質問者の「いつ死ぬのか」あの悩みこそ今後どのように生きたらという意味だったのではないかと思う。きっとお金の悩み、気持ちとかえはないかと。他の職業（ケアマネ、ライフプランナー、医者、FP）の方とも一緒にできるともっと皆さんが幸せにそれこそ「老活」ではないかと思う。ありがとうございました。

・わかりやすく身近なテーマで興味深かった。「誰に相談したら」という質問に対し「傾聴者が必要」と感じた。意思決定は自分ですることであると思う。そこを引き出すのは傾聴の力である。

・他人事ではなく自分自身のことと思い熱心に受講できた。

・いろいろ考えることができて良かった。ひとり暮らしなので遠く離れた子供と話し合いたいと思う。

・堅苦しいと覚悟して参加・・とても聞きやすく（ソフトな語り口で）よくわかった。人柄がにじみ出て聞いていてホッとした。またチャンスがあれば参加したい。

・今後の人生の参考にしたいと思う。本日は本当にありがとうございました。

・寺・お墓の件ですが時代とともにどんどん変化して、現在と将来どのように変化していくのか、少子高齢化時代、色々と考えてみたいと思う。

・今回は老活の入り口で終わった感がある。胃ろうについての認識も改めて勉強しようと思った。私も例にもれず否定的にとらえていたので高齢者の治療いつまで受けたらいいのか？生きさせるのか？判断の基準がもっと市民に分かりやすいようにお話願います。

・新学園で勉強させていただきありがとうございました。

・心つもりノートの内容を詳しく聞きたかった。

・急ぎますので、記入できずゴメンナサイ！！

・とても良かった。

・「残された人生をどう過ごすのか」癌の終末期の方に携わっているがその人その人の生き様によっても違うこともあると感じている。この点がとても心に残った。ありがとうございます。私自身も今を大事にしていきたいと思った。

・岩手に清水先生が来てくださりとても感謝です。これからも先生の講演を楽しみにしております。ありがとうございました。

・訪問看護ステーションでターミナルの方を訪問している。本日の話とても勉強になった。質問された方の話もとても貴重な話と受け止めた。まだまだ勉強不足なので本日の講演をもとにもっと勉強し利用者様に接していきたい。

・このように地域に開放され公開講座が行われることは大変ありがたい。貴重な時間をありがとうございました。

・保健医療の大学だが、人間を肉体的存在だけでなく精神的な面、心を大切にする考え方が感じられてよかった。

＜ご意見＞

・テレビ局のカメラ、写真などをとっており、集中できなかった。特にテレビ局のカメラはよくない。

・開演前にあらかじめ質問をとる方法もあってよいのでは。

・マイクが聞き取りにくかった。

〈今後受けたい内容〉

・今後も様々な公開講座を開いてほしい

・看護を中心に幅広く市民向け講座が開かれることに心強く期待しています。ありがとうございました。

・傾聴について勉強したい。

・清水先生の具体的な介護体験を聞ける機会があったらと思う。

・医療側のものとして次の詳しい話を聞いてみたい。とても参考になった。

・人生を楽しく生きるためには　など聞いてみたい（健康面より）

・学長の講演第 2 弾を期待している。

・健康問題について

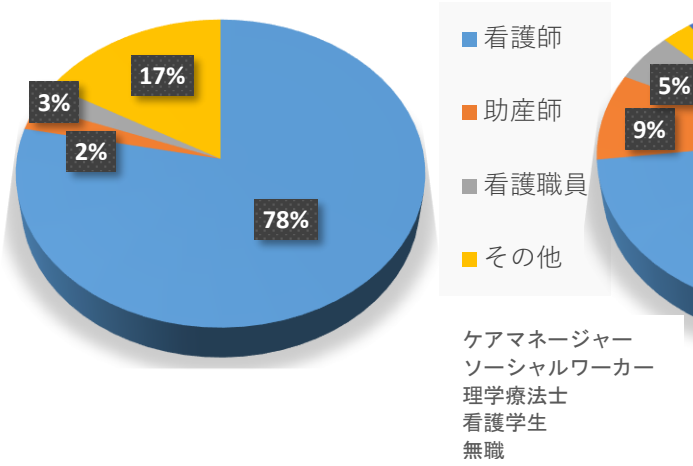
・老後の過ごし方の話をもっと聞きたい。今後も機会があればと思う。次回を待つ。

〈大学への要望〉

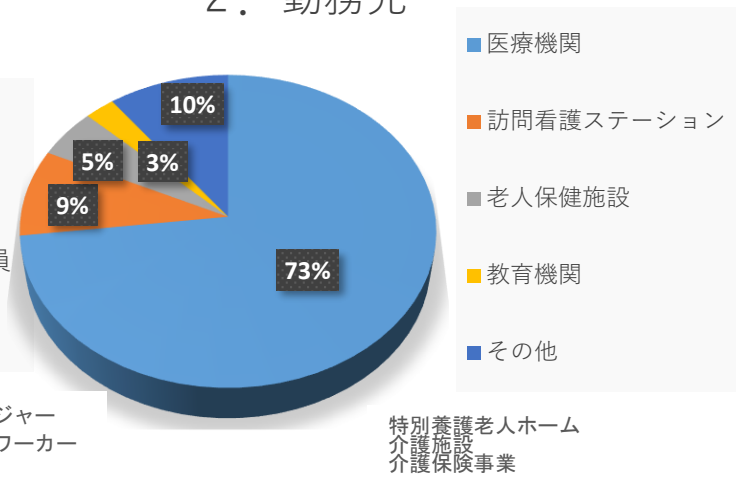
・学生さんたちにより良い医療にたずさわれる人になってほしい。希望します。

平成 29 年度第 2 回公開講座アンケート結果（78 名）

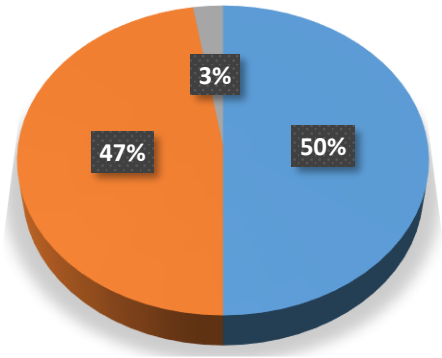
1．職業



2．勤務先

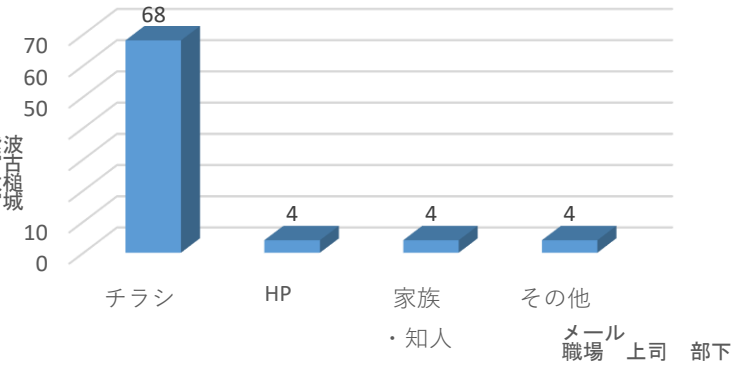


3．居住地

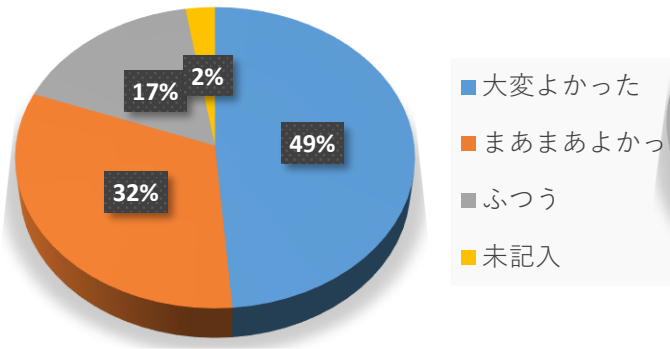


4．公開講座をどこで知りましたか

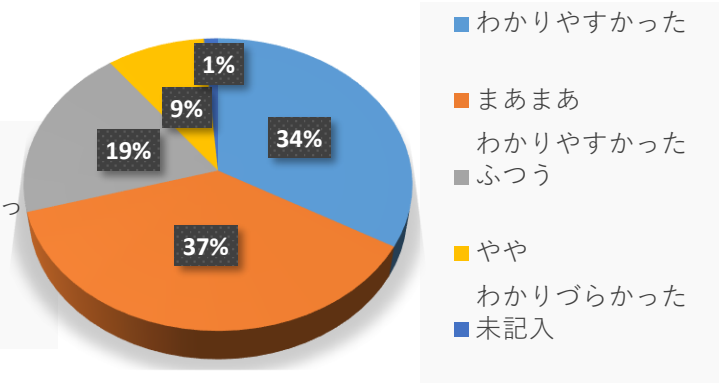
（複数回答）



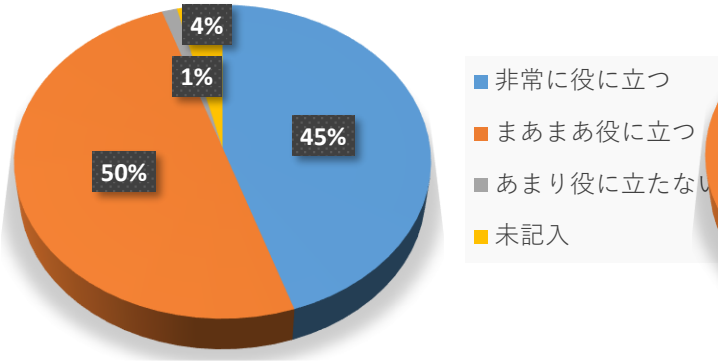
5．公開講座はいかがでしたか



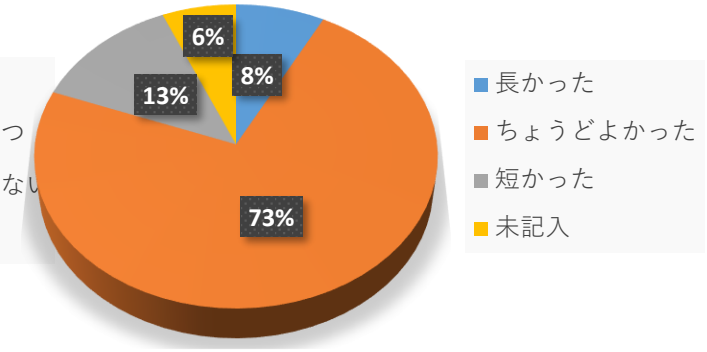
6．講演は分かりやすかったですか



7．講演内容はあなたに役立つものでしたか



9．開催時間



8．全体を通しての感想

＜内容について＞

・清水先生の講演を拝聴できてとても良かったです。
・充実した内容でよかった。
・とてもためになる内容でした。
・自分も高齢等で大体は考えていたが具体的に家族には伝えていない。いざというときの心変わりもあり得ると思う。終末の状態にどんなものがあるのかもわかっていない。今日の勉強はもっと深く真剣なことだと思った。
・昨年セミナーに参加し大変感銘を受け、自身の指針となっている。4 月から精神科へ異動し倫理について考えさせられている。

・ACP について学ぶことができてよかった。
・体験なども含め講義していただき分かりやすかった。ありがとうございました。
・ACP について理解できた。とてもわかりやすくためになる講演だった。ありがとうございます。
・身近な家族にも起こりうる場面、勤務上日常的にある場面を想起し整理することができた。
・今の医療やインフォームドコンセント上、説明だけして自己責任で選んで下さい、と指示されたことがあり、先生の話された ACP の在り方に共感する。医療従事者の人間性や高い倫理観など求められると思った。ぜひ先生の言われる ACP が実現すればいいと思う。
・人生を送るために生命を整える、その人の人生を考えながら生命をコントロールするのが医療との言葉に共感した。
・事前指示書など知ることができてよかった。

・本人や家族へどのような言葉かけが必要か治療選択の医療側の説明の仕方のヒントがあり良かった。
・プロセスが大事、最終段階に限らずプロセス大切
・年を重ね判断力が難しくなってきたとき、本人より家族重視となってしまう。その家族間で意見が割れると KP の考え重視するが、あとから悩む。元気なうちから ACP できていればいいのですね。
・意思決定の場面で、患者より家族中心になっていることが多い。まず本人がどうしたいか思いを聞き家族につなげられるよう業務に向かいたいと思った。
・ACP について米国からの流れをそのまま受け入れるのではなく、又型にはめた考えをせずにそれぞれの生き方にあった最後を見出していくプロセスととらえて考えていかなければと感じた。
・介護分野にケアマネージャーがいるように医療分野でもそういった専門職が必要となってくるのかなと思った。
・受講したことでますますジレンマに陥った気がしている。
・興味深い内容だった。資料もたくさんあり、同じ職場の人とシェアしたい。大変貴重な公開講座ありがとうございました。
・今回の内容はとても根拠になるのでスタッフにも伝えたい。
・もっと詳しく聞きたい。
・貴重な話をありがとうございました。興味深い内容だったのでさらに具体を聞きたい。
・臨床現場で感じていることが多々あり講義を通していろいろ考えることができた。今後さらに先の話を聞きたい。
・清水先生の話は大変聞きやすい。時間内ではおさまりきれない沢山の情報、本日話しきれなかった余談にもとても興味がある。もっと話を聞きたい。ありがとうございました。
・一般の方には難解な言葉もあり、より具体的な事例を提示し理解していただくとよいのではないか。
・も少し具体的な事例を学びたい。
・具体例があればもっと分かりやすかったと思った。
・本題に入るまでの時間が長い。日本での事例をもっと聞きたかった。
・普段と異なった視点での意思決定支援の講義を受けに来たが、時間配分のせいかもう少し具体的な内容が聞きたかった。スライドを飛ばす部分もあり話の流れがとびとびだったと感じた。
・ケアプランニングはわかったが、意思決定のためにどういう関わりをすればいいかというところ（一緒に、というのは理解できるが）が知りたかった。前置きが長かった。

＜時間について＞
・時間が長ければよかった。もう少し話を聞いてみたかった
・内容（学長さんの話）のわりに時間は長かったと感じる。結局何を重要点として話したかったのかわかりかねた。
・時間で終わってほしい。資料分講義してほしい。

・120 分ちょうどで終わればなおよい。
・途中の休憩を一時間後にした方が集中力が下がらなかったと思う。
・休憩時間を取らず 1 時間くらいが良い。シリーズものになるかもしれないので難しいとも考える。

＜マイク音量について＞
・声が小さく聞き取れなかった。
・後ろまではっきり聞こえるマイク音量にしてほしい。
・興味深い内容でしっかり伺いたかったが、話し方が優しすぎてがっつり強く伝わってこなかった。マイク音量を調整してほしい。
・会場が広いためかマイクの声がはっきりしないのが残念だった。
・講師の方のマイク音は聞こえるがサイドのマイクが聞こえづらく声がこもっているようだった。

＜その他＞
・赤ちゃん・小さな子供連れの参加を受け入れる主産者側の考えが素晴らしい。

10. 今後受けたいと思う講座の内容・本学への要望

＜講座の内容＞

今回の講座に関連
・経験や事例を挙げての講義
・意思決定できず迷っている患者・家族に対して医療者としての関わり方について具体的な話
・包括ケアの進め方
・子どもの意思決定支援とアドバンス・ケア・プランニング
・地域への退院支援についての意思決定支援

学長の講義
・老活について・エンドオブライフケア
・哲学、死生学、臨床倫理学、倫理に関すること（4）
・清水先生の授業（一部分でも）公開授業にしてもらえるとありがたい。

その他
・小児看護
・もう少し実践的な内容（医療現場 Dr・専門職）の講演
・医療・病院などの関係（パンフレット等の知識ではなく）
・また受講したい。

＜要望＞
・講演終了後の大学内見学はスケジュールがあり残念だった。待ち時間内に見学させてもらいたかった。

2017 年度　研究委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：山本勝則

委　員：江守陽子、木内千晶、庶務：星雅俊（会計）

オブザーバー：濱中喜代(学部長)

2.　委員会の開催

委員会は 8 月を除き原則月 1 回の開催を計画し、計 11 回(臨時 1 回)開催した。

4/19、5/18、6/13、7/11、7/19(臨時)、9/12、10/10、11/14、12/12、1/9、2/13

以上 11 回

3.　委員会活動目標

1）研究費に関する規程を整備する

2）研究活動を滞りなく実施できる体制を整える

3）教員の研究活動を全般的に活性化する

4.　活動内容と点検評価

1）研究費に関する規程を整備する

個人研究および学内共同研究費について方針が定められ、それに則って規程・規定および関連する運用方法等の制定と改定が行われた。運用後半年程度であり十分な評価期間ではないが、現時点では運用上の問題は生じておらず、概ね目標は達成されたと判断する。

2）研究活動を滞りなく実施できる体制を整える

科学研究費の獲得等、研究推進のために整備することが必要な規程類が開学までに整備されていなかったため、整備に取り組んだ。公的研究資金の適正管理（不正防止）に関する規程・計画に関わる 6 文書を整えるなど、研究活動を実施するための体制づくりを行った。

年度内での規程等の作成実績としては一応の成果であるが、今後整備を必要とする文書が多数あり、必要最低限の成果であると評価する。

3）教員の研究活動を全般的に活性化する

個人研究の活性化については、研究委員会としての取り組みはほとんど行うことができず、ほとんど成果を示すことができなかった。一方、学内共同研究については 3 プロジェクトが立ち上がり、学内の共同研究発表会を開催することもできた。したがって、一応の成果とみなすことができると判断する。今後、研究委員会が用意した課題ではなく、自主的な学内外の共同研究が行われることが望ましい。

そのためには、研究活動活性化のための FD を開催することが当面の課題であると考える。

5.　次年度に向けた課題

・研究活動活性化のための FD の企画・実施

・研究不正の防止等に関する規程類の整備

以上

2017 年度　自己点検評価委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：濱中喜代

委　員：松井照雄、清水哲郎、豊嶋三枝子、竹本由香里、庶務：七尾明恵(総務)

2.　委員会の開催

6/2、7/4、1/10、9/5、3/8　の計 5 回開催した。

3.　委員会活動目標

自己点検・評価の基本方針：

完成年度までは設置審査に提出した内容に沿って、進められているかどうかの視点で点検・評価を行う。

1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表に関すること。

(1) 各委員会から出された活動内容に関して、必要な内容が網羅されているか点検し、必要時検討を求める。

(2) 年度末に各委員会から活動報告を提出してもらう。また研究業績に関しても領域毎に報告してもらう。点検整備したうえで自己点検・評価報告書(委員会活動報告と教育・研究年報)を作成する。(学内版)

2) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関すること。

(1) 今後に向けて必要なデータの整理および情報収集に努める。

4.　活動内容と点検評価

1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表に関すること。

初回の委員会で、自己点検評価委員会の基本方針および活動計画の確認し、上記に決定した。また各委員会から出された活動目標・活動内容に関して、必要な内容が網羅されているか委員会で点検し、必要時検討を求め、修正してもらった。

教育・研究年報についての書式および内容等の検討を委員会で行い、3 月はじめまでに各委員会から活動報告を提出してもらった。また研究業績に関しても領域毎に報告してもらった。その他社会貢献については各自から書式に沿ってデータを収集した。その内容を点検整備したうえで自己点検・評価報告書(委員会活動報告と教育・研究年報)作成した(学内版　50 部)。　また、Ｗｅｂ上の公開について検討を行い、ＰＤＦ版で公表した。

2) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関すること。

大学改革支援・学位授与機構主催の研修会に学長と学部長が出席し、今後に向けて情報収集することが出来た。そのほか設置審査に関する書類作成等については随時委員長を中心に対応した。

全体総括として、初年度に計画していた活動については問題なく進めることが出来た。次年度も継続して対応していきたい。

5.　次年度に向けた課題

1）自己点検・評価報告書(委員会活動報告と教育・研究年報)の作成および公表に関すること

2）完成年度後の自己点検評価に向けた情報収集の継続

以上

2017 年度　防火防災・環境保全委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：齋藤史枝

委　員：成田真理子、大﨑真、鹿糠全、庶務：後藤泰輔（総務）

オブザーバー：濵中喜代(学部長)

2.　委員会の開催

委員会は、不定期ではあるが必要時開催し、以下の日程で 9 回開催した。

4/6、6/7、7/5、8/1、9/6、10/3,10/12、11/2、2/15　以上 9 回

3.　委員会活動目標

1)学生・職員の危険防止および健康障害を予防するための対策に関すること

・健康診断受診の徹底について啓発する。(100%受診)

・教職員、学生の実習や時間外活動時の傷病など健康障害発生の把握と対応を行う。

・学生の心身の障害発生時は、学生担任、アドバイザーと情報共有し対応を行う。

・緊急時に迅速に対応できるよう緊急連絡網を整備する。

2)感染症発生時の対応に関すること

・感染対策マニュアルに則り、対策を行う。

・手指消毒等感染管理の徹底を図る。

　学内の擦式アルコール消毒の配置

　実習時の手指消毒等感染管理の徹底

・集団感染発生時、2 次感染など感染拡大の予防を行う。

3)防火防災に関すること

・学内の防火防災システムの構築と災害時対策を行う。

・年 2 回防災訓練を実施する。

4)防犯に関すること

・学生の学内滞在時間など、安全上問題を生じる場合は、制限を設ける。

・長期休暇前に「緊急時対応ポケットマニュアル」をもとに緊急時対応について説明し、綱紀粛正について啓発を行う。

・不法侵入に対する対応等を検討し、フローチャートを作成し周知する。

5)廃棄物処理に関すること

・盛岡市のごみ分別に沿い、ごみの分別を徹底する。

・個人情報の含まれる書類類に関してはシュレッダーをかけ、個人情報の保護を徹底する。

・実習等で使用した医療廃棄物については、適切に処理する。

6)その他防火防災・環境保全に必要なこと

・AED に関して、教職員及び学生に使用方法の伝達講習を行う。
　一次救命処置技術（AED 含む）指導経験者が指導を行う。

4.　活動内容と点検評価

1)学生・職員の危険防止および健康障害を予防するための対策に関すること

・教職員、学生とも、健康診断については 100％の受診率であった。
・緊急時の緊急連絡網について体制を整えることができた。

2)感染症発生時の対応に関すること

・感染対策マニュアルの作成、提示を行うことができた。
・感染管理に関するトイレの掲示を行った。
・手指消毒等感染管理として、学内の擦式アルコール消毒の設置、年 2 回の交換を行った。集団感染等の発生はなく、感染管理としての効果はあったと考えられる。年 2 回の擦式アルコール消毒の交換は、使用量を確認しながら継続していきたい。
・インフルエンザに関して、学生 76 名、教職員 26 名が予防接種を行った。インフルエンザ罹患は、学生 1 名、教員 1 名、職員 2 名にとどまった。
・集団感染等の発生はないが、流行性の感染事象は季節ごとにあるため、さらに啓発方法を検討していきたい。

3)防火防災に関すること

・災害対策マニュアルの作成、提示を行うことができた。
・災害対策マニュアルに提示した備蓄について予算手当をしてもらえるよう要望しており、今後充実していきたい。
・9 月に防災訓練の事前学習、10 月に防災訓練を実施できた。アンケート調査を実施し、防災訓練に関して、おおむね役割を遂行することができたとの評価を得た（別紙 1)。次年度には学生も増えるが、システムの構築はできたため、アンケートの意見を参考に実施時期、実施内容について再検討し、より実践的な防災訓練を実施していきたい。
・災害時の安否確認連絡システムを整えることができ、1 月にトレーニングを行った。結果、設定上大学のメールのみに限定してしまったため、ID とパスワードを求められ、手間がかかってしまったというアンケート結果が示された（別紙 2)。スムーズに連絡が取れるよう、携帯電話等でも事前にアンケートツールを開き、緊急時に ID、パスワードが求められないような状況を整えるなど、訓練時の対応も検討したい。
・2 月に緊急連絡網のトレーニングを実施した。結果、発信に 8 分かかり、20～2 時間 30 分の差はあったものの、大きなトラブルなく訓練を実施できた。今後、教職員の増員もあるため、緊急連絡網の見直しを行い、トレーニングを継続していきたい。

4)防犯に関すること

・学生の学内滞在時間について、事務部門で検討し安全に管理されている。
・長期休暇前に「緊急時対応ポケットマニュアル」をもとに緊急時対応について説明し、綱紀粛正について啓発を行った。
・不法侵入に対する対応及びフローチャートを作成まで至らなかった。
・2 度の不法侵入があり、その都度対応している状況であり、不法侵入対策を講じていく必要がある。

5)廃棄物処理に関すること

・盛岡市のごみ分別については、特に問題なく対処されている。
・個人情報の含まれる書類類に関しても、特に問題となる事案はなかった。
・実習等で使用した医療廃棄物の問題もなかった。

6)その他防火防災・環境保全に必要なこと

・4 月に教職員に対し、AED 使用を含む救命処置講習会を行った。アンケート結果から、実践に結び付く内容であったと評価する（別紙 3)。次年度以降も継続して実践し、学生向けのコースも検討していきたい。

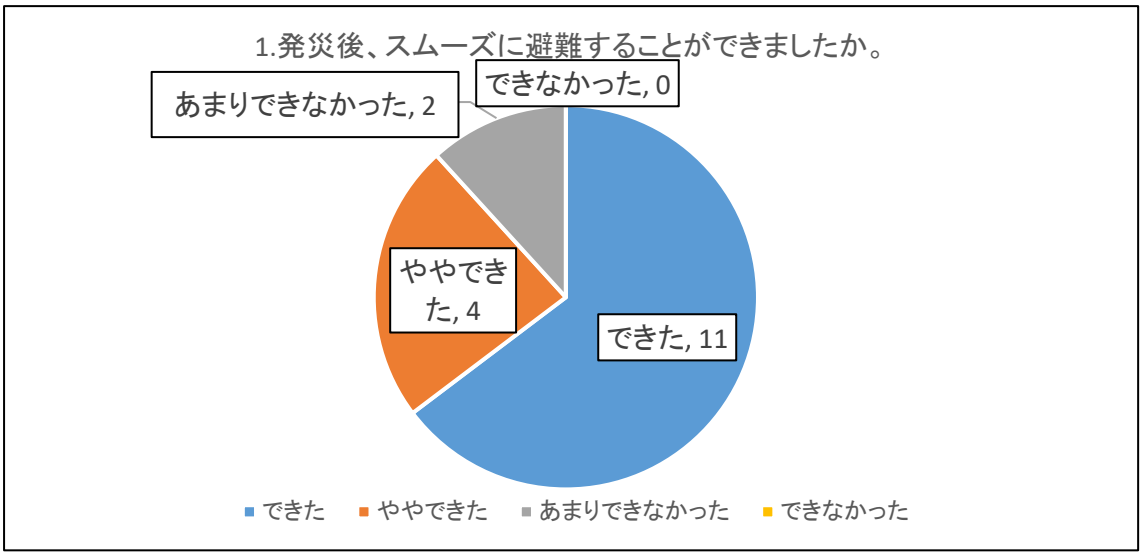
以上のことから、今年度防災及び感染に関する対策についての体制を整えることができたと評価できる。しかし、不法侵入者対策等、不足な点もあり、今後検討していきたい。

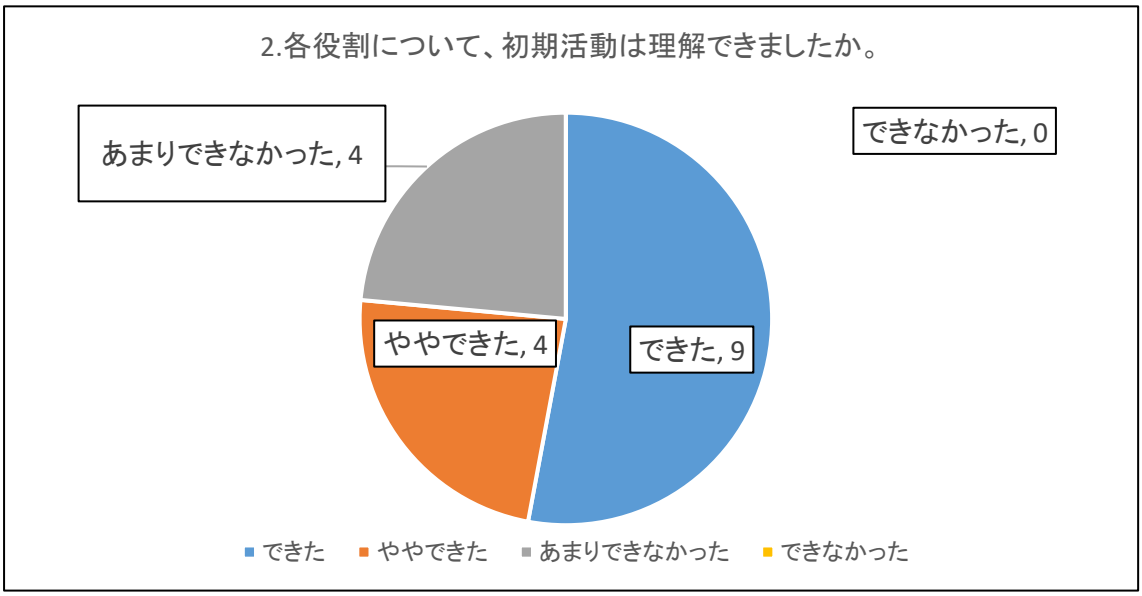
5. 次年度に向けた課題

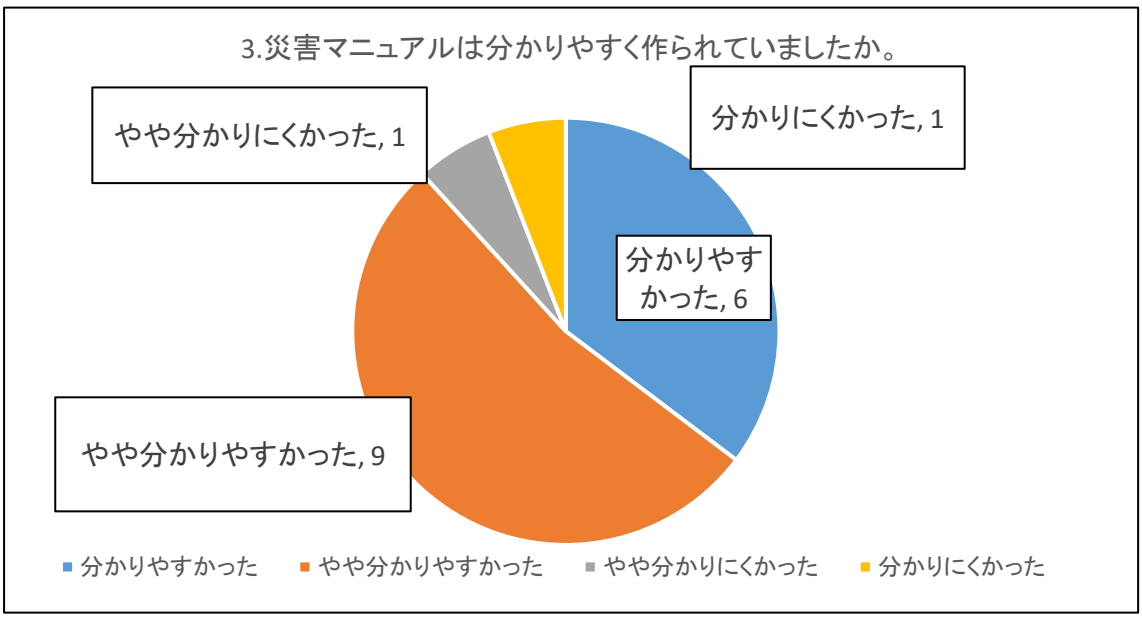
1）救命処置講習会の継続した実施と学生向けの講習会の検討を行う。
2）年 2 回の防災訓練実施を徹底する。
3）不法侵入に対する対策の検討を行う。
4）学内感染管理の徹底と、感染管理に関する啓発方法の検討を行う。
5）備蓄について、計画的に整える。

以上

平成 29 年 10 月 20 日防災訓練実施後アンケート結果







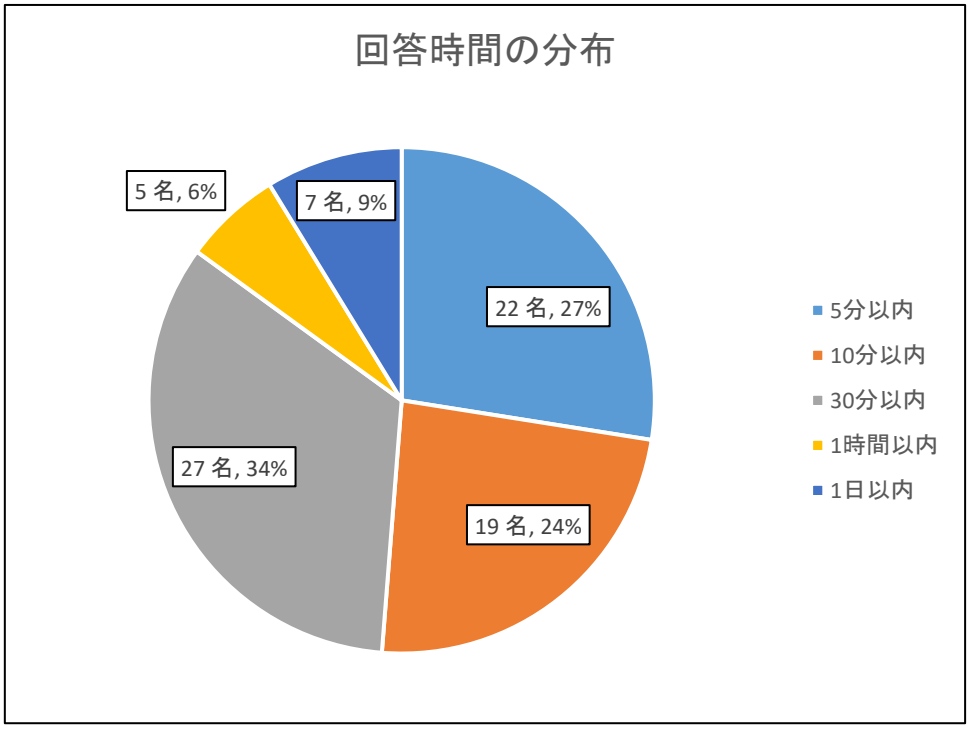
4. 自由記述

- 災害マニュアルはわかりやすいと思います。本日の動きがわかりづらかったですが、大変だったと思います。お疲れさまでした。
- 全体的に避難が早すぎたと思う。
  発災時、2 回目の放送の指示を聞いてから、靴紐を結び、上着をとって研究室を出ようとしたら、「逃げ遅れた人」になっていた。
- 訓練の準備等大変お疲れ様でした。災害マニュアル目を通しましたが、分かりやすいと思いました。詳細についてまた気が付いた点がありましたら、お伝えいたします。
- 防災訓練としては充分だと思います。今後もシンプルに、学生に防災訓練を体験させていければ良いと思います。
- お疲れ様でした
  マニュアルは詳細に記述されていましたが、詳細すぎること、あちらこちらに記述されていること、マニュアルと訓練の記述に食い違いがあるなど、分かりにくかったです
  班には複数の教職員がいますが、班の中の誰がどの役割を遂行したかわかりませんでしたし、複数の方が重複した動きをしていたように思います
  学生数などの出欠席数にも食い違いがありました
  特にリーダー役の方は動き回らず、全体の情報把握と指揮をお願いしたいです
  マニュアルなので全体を簡潔にした方がよいと考えます
  誰が何をするのか A4 用紙 1 枚程度に明確にできるとよいと考えます
  今回、誰もが役割に不安がある動きになっていたと思います
  また、講義の時間に食い込んでいることで、授業デザインに影響がありました
  今後も講義時間を割く必要があるのでしょうか
- 避難誘導に関する各教員の動きをさらに詳細に説明すべきであった。教職員全員の最終打ち合わせを行う必要があった。各ブースでの担当教職員の役割を詳細に説明すべきであった。学生の防災訓練への情報の漏れがあり、一部詳細なスケジュールまで把握している学生もおり、初めから開示すべきであった。
- 学生には避難訓練の実施を知らせず実施の予定だったが、学生に伝わってしまっていたのが残念だった。教員には周知していたはずだが、なぜ？
  今回は自身の役割を確認し、避難することが主となっていたが、有事の際には他者の役割も支援する必要があると思う。今後も訓練を重ねていく必要があると思う。
  安否確認システムの訓練も単独でできればよいと思う。
- 次回は、けが人がでたという想定も入れたほうが良いかもしれません。
- 事前打ち合わせの際に、マニュアルにある物品や詳細については訓練をすることで今後調整すると認識していました。今回は活動のさわり部分で終わりだったので、各班の活動や物品の見直し等どこかでできる機会があればいいと思いました。
- 最初にしては学生の避難も含めてスムーズにできたと思います。消防の方や防災のシステム担当者も同席出来て、防災意識ができたことは良かったと思います。お疲れさまでした。

18.1.30 緊急時連絡訓練まとめ

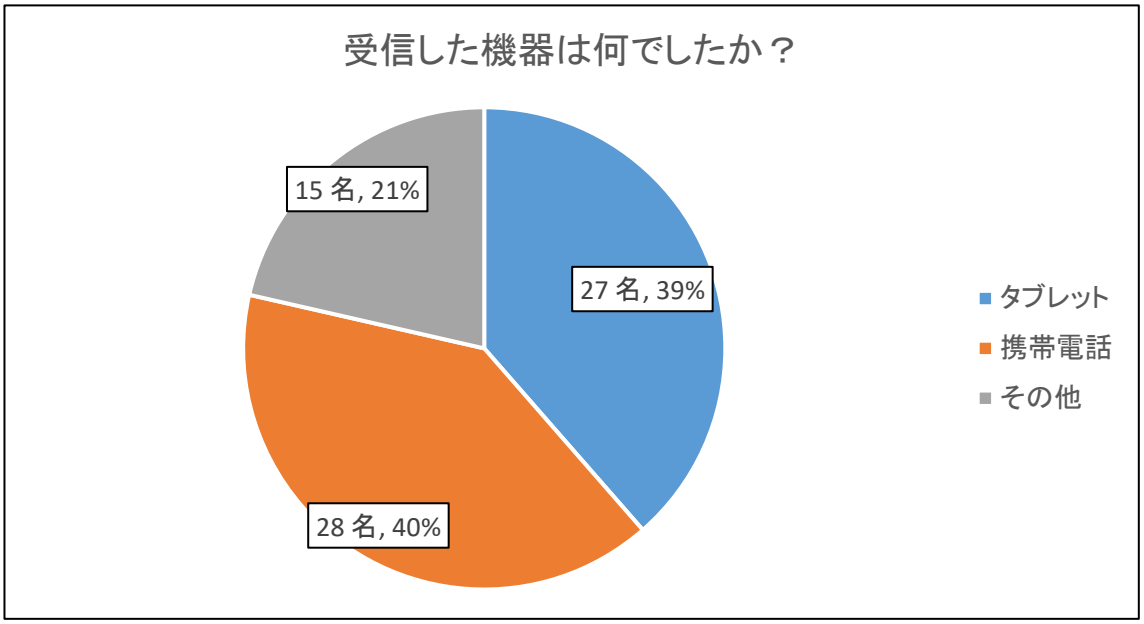
- 安否確認(予行演習 20180130)

日　時：　1/30（火）　12：30 アンケート送付
対象者：　学生 77 名　教職員 29 名　計 106 名
回答者：　80 名
回答率：　75%

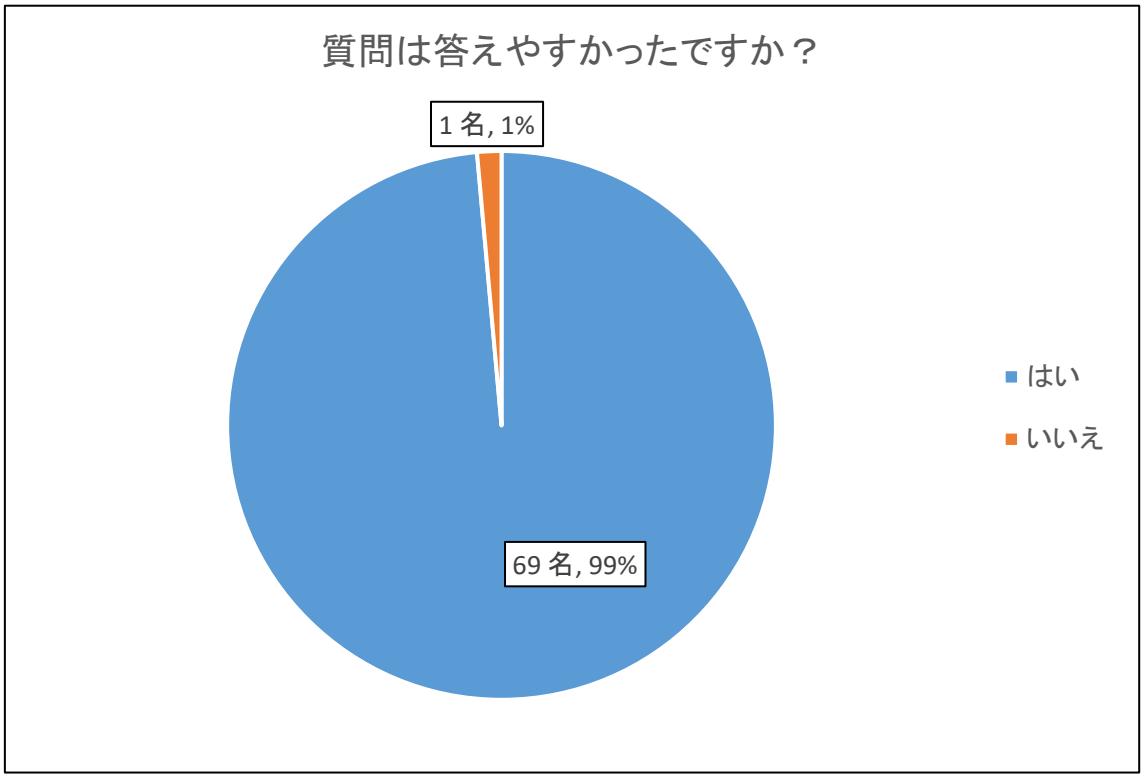


● 連絡訓練実施後アンケート

対象者人数　学生 77 名　教職員 29 名　計 106 名
回答者　70 名
回答率　66%



その他の内訳
パソコン　13 名（18%）
複数の端末　2 名（3%）

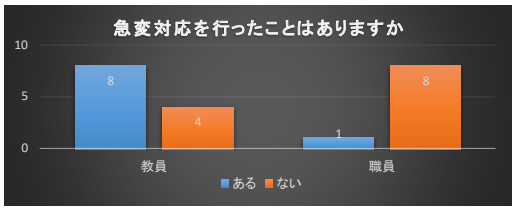


訓練でお気づきのことがありましたらご記入ください（自由記述）

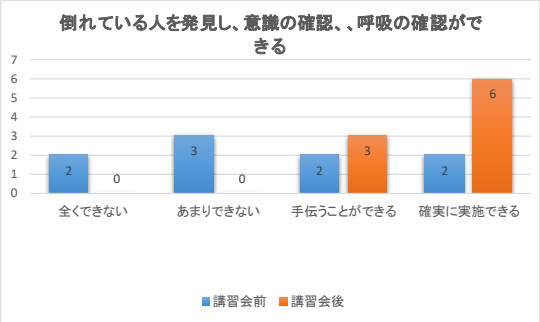
- 長期休暇中や実習期間中の場合は、所在を確認することも必要になってくると思いました。
- ログインが手間だった。
- 分かりやすかったです
- Google フォームでの安否確認だとパスワードをど忘れした時などは確認が難しいと思います。
- いちいちメールアドレスを打つのがめんどくさかったです。なので緊急時にすぐ対応は厳しいと思いました。また、携帯やタブレットを持ち歩いていなかった場合は意味がないと思った。
- 事案発生直後の安否確認は状況によっては混乱していて難しいと思う。（現に東日本大震災ではネットの状況が不安定で返信できなかった。）事案発生後いつ頃配信して返信期限をどうするかの検討が必要だと思います。
- 災害時、電子機器等が正常に動作するか、通信が出来るのか、そのような事が気になりました。
- 電波を受信できない状況の時には、返信できないのでは？災害時に安否の返信をすることは優先度が低くなってしまうように感じる。
- 特になし（12 名）

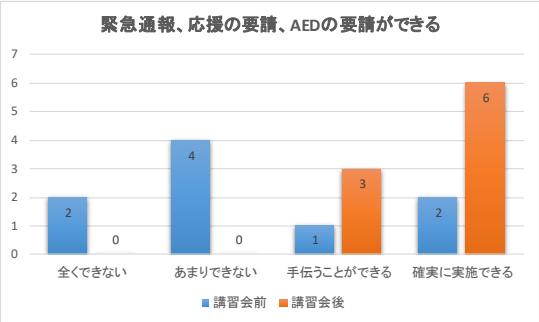
一次救命処置講習会アンケート結果

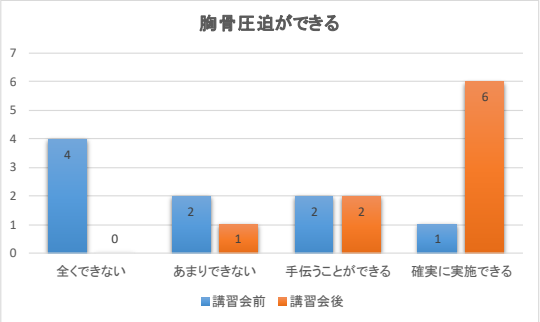
救命処置講習会参加者:21名
出席率:87.5%

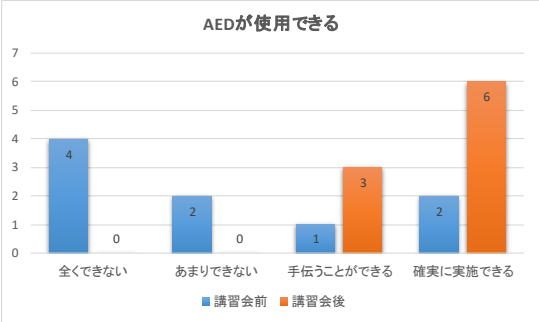


救命処置技術はどの程度実践できますか？　：　職員

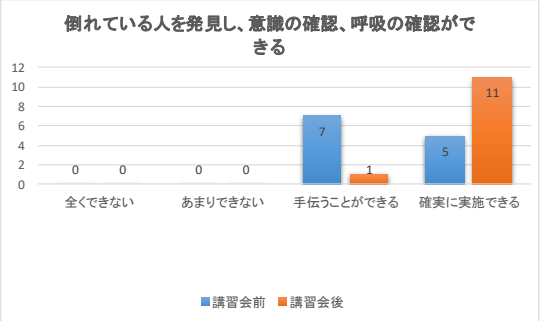


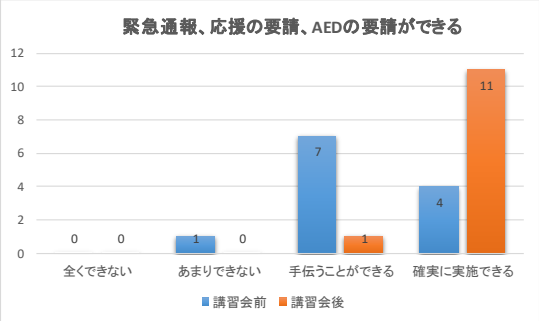


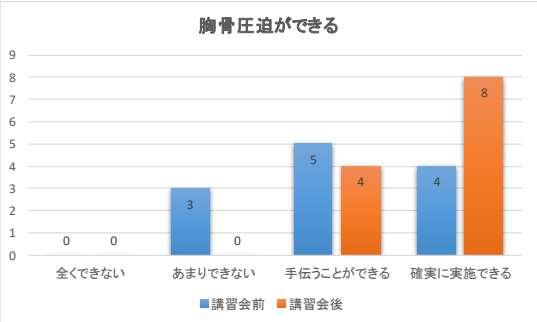


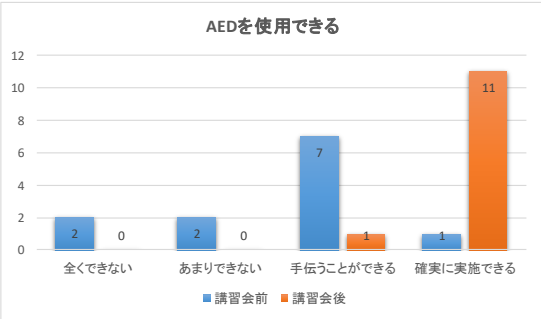


救命処置技術はどの程度実践できますか？　：　教員









2017 年度　倫理委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：遠藤芳子、濵中喜代、山本勝則、松井照雄（総務課）、庶務：七尾明恵（総務）

2. 委員会の開催

原則月 1 回の開催を計画し、計 9 回開催した。

4/6、5/18、6/28、8/23、10/26、11/22、12/27、1/31、2/28　以上 9 回

3. 委員会活動目標

1）研究倫理審査手順を作成する

2）教員・学生の研究倫理審査を的確に実施する

3）研究倫理の啓発活動を行う

4）利益相反に関する書類を整備する

4. 活動内容と点検評価

1）研究倫理審査手順を作成する

委員会にて審査手順を検討し、以下の書類を整えた。

・岩手保険医療大学研究倫理指針

・研究倫理審査チェックシート

・研究倫理審査申請書

・研究倫理審査結果報告書

・研究倫理審査結果通知書

・研究倫理再審査申請書

・研究変更申請書

・研究(継続-終了)報告書

・説明書-同意書文例見本

・説明文-同意書見本

・人を対象とする医学系研究にかかる利益相反申告書

2）教員・学生の研究倫理審査を的確に実施する

（1）申請状況

2017 年度 第 1 回　締切日 6 月 30 日 0 件

2017 年度 第 2 回　締切日 7 月 28 日 2 件

2017 年度 第 3 回　締切日 8 月 31 日 0 件

2017 年度 第 4 回　締切日 9 月 29 日 1 件

2017 年度 第 5 回　締切日 10 月 31 日 2 件

2017 年度 第 6 回　締切日 11 月 30 日 1 件

2017 年度 第 7 回　締切日 12 月 26 日 0 件
2017 年度 第 8 回　締切日 1 月 31 日 0 件
2017 年度 第 9 回　締切日 2 月 28 日 0 件
2017 年度 第 10 回　締切日 3 月 30 日 1 件　　計 7 件

(2) 審査会開催状況

8/9、9/13、10/11、11/8、12/13、12/27、1/10、4/11　　計 8 回

8 月の審査会においては申請者の説明を求め、質疑応答を含め審査を行った。

しかし、9 月～翌年 3 月の申請 7 件（うち 1 件は再審査申請）は迅速審査希望であったため、書面による審査とした。

(3) 研究倫理審査結果

【受付】H29.7.10【承認】H29.8.24
【受付】H29.7.27【承認】H29.8.24
【受付】H29.9.29【承認】H29.10.26
【受付】H29.10.31【承認】H29.11.22
【受付】H29.10.31【承認】H29.11.22
【受付】H29.11.21【承認】H30.1.11

・開学 1 年目の研究倫理審査件数は、7 件であった。
・審査手続きは 5 件が 1 月以内、2 件が 2 月以内で承認に至り、スムーズであったといえる。
・倫理審査申請 6 件のうち５件が質問紙調査であり、１件がインタビュー調査であった（1 件は再申請）。また、４件が本学の学生に対する調査であった。原則として質問紙調査は申請者の希望により、迅速審査が認められるが、インタビュー調査は、今後は正規の審査とすることも検討したい。
・本年行った２件の正規の倫理審査会には、「男性 3 名、女性 3 名」「本学所属研究者 4 名、本学所属有識者 2 名」の構成であり、複数の職種、両性による構成員となった。今後は、他機関、法律関係、一般人等の参加についても検討すべき課題が残された。

3) 研究倫理の啓発活動を行う

・研究倫理審査申請にあたって、日本学術振興会による研究倫理 e ラーニングシステムを採用した。申請者の全員が受講していた。
・e ラーニングシステムとは別に、研究倫理に関する教育、講習会の開催も検討していく必要があると思われる。
・その他、研究遂行上の被験者・被調査者からの問い合わせ、クレーム等は現時点では発生していない。

1．教員-学生の研究倫理審査

・開学１年目の研究倫理審査件数は、7 件であった。

・審査手続きは 5 件が 1 月以内、2 件が 2 月以内で承認に至り、スムースであったといえる。

・倫理審査申請 6 件のうち５件が質問紙調査であり、１件がインタビュー調査であった（1 件は再申請）。また、４件が本学の学生に対する調査であった。原則として質問紙調査は申請者の希望により、迅速審査が認められるが、インタビュー調査は、今後は正規の審査とすることも検討したい。

・本年行った２件の正規の倫理審査会には、「男性 3 名、女性 3 名」「本学所属研究者 4 名、本学所属有識者 2 名」の構成であり、複数の職種、両性による構成員となった。今後は、他機関、法律関係、一般人等の参加について検討すべき課題が残された。

2．研究倫理の啓発

・研究倫理審査申請にあたって、日本学術振興会による研究倫理 e ラーニングシステムを採用した。

4）利益相反に関する書類を整備する

利益相反については、大学全体で検討することとし、倫理委員会にては着手はしていない。

しかし、「人を対象とする医学系研究にかかる利益相反申告書」を作成した。

5.　次年度に向けた課題

1）スムースな研究倫理審査の体制

2）．研究委員会と提携した研究倫理教育活動の展開

（1）研究活動における不正行為に関する啓発

・データの改ざん、ねつ造、盗用の事例紹介

・二重投稿、不適切なオーサーシップとは

・研究費の不正流用の禁止、防止

（2）倫理的研究活動の進め方、考え方

・研究者、被験者双方にとって公平・公正・適正な研究方法の啓発

・倫理的配慮の意味

3）研究倫理審査体制の強化

・外部審査委員、法律家等の専門職者からなる構成

・倫理審査委員の数の検討

以上

平成29年度　研究倫理審査受付・審査状況

締切日	研究課題名	研究者	審査経過	審査結果	承認番号
2017年度第1回受付 （締切日6月30日12時）	申請者なし	―	―	―	―
2017年度第2回受付 （締切日7月28日12時）	「子育て中の経済的負担と女性の健康についての調査」	江守陽子	【受付】 H29.7.10 【通常倫理審査】 H29.8.9 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.8.14 【回答書提出】 H29.8.21 【委員会審議】 H29.8.23 【結果通知】 H29.8.24	承認 （H29.8.23）	岩保倫 1700001
	「看護職における中間管理職の部下からのハラスメントの実態および職務満足度とソーシャルサポートとの関係」	【代表研究者】 成田真理子 【共同研究者】 佐藤恵・作間弘美・竹本由香里・豊嶋三枝子	【受付】 H29.7.27 【通常倫理審査】 H29.8.9 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.8.14 【回答書提出】 H29.8.21 【委員会審議】 H29.8.23 【結果通知】 H29.8.24	承認 （H29.8.23）	岩保倫 1700002
2017年度第3回受付 （締切日8月31日12時）	申請者なし	―	―	―	―
2017年度第4回受付 （締切日9月29日12時）	「岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査」	【代表研究者】 竹本由香里 【共同研究者】 作間弘美・大谷良子・遠藤芳子・江守陽子	【受付】 H29.9.29 【迅速倫理審査】 H29.10.11 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.10.13 【回答書提出】 H29.10.24 【委員会審議】 H29.10.26 【結果通知】 H29.10.26	承認 （H29.10.26）	岩保倫 170003
2017年度第5回受付 （締切日10月31日12時）	「看護大学生の『ケア・スピリット』 その変化－量的データからの分析－」	【代表研究者】 石井真紀子 【共同研究者】 佐藤恵・成田真理子・山本勝則・濱中喜代・清水哲郎	【受付】 H29.10.31 【迅速倫理審査】 H29.11.8 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.11.10 【回答書提出】 H29.11.20 【再審査による指摘事項通知】 H29.11.20 【回答書再提出】 H29.11.20 【委員会審議】 H29.11.22 【結果通知】 H29.11.22	承認 （H29.11.22）	岩保倫 170004
2017年度第5回受付 （締切日10月31日12時）	「看護大学生の『ケア・スピリット』 その変化－質的データからの分析－」	【代表研究者】 石井真紀子 【共同研究者】 佐藤恵・成田真理子・山本勝則・濱中喜代・清水哲郎	【受付】 H29.10.31 【迅速倫理審査】 H29.11.8 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.11.10 【回答書提出】 H29.11.20 【再審査による指摘事項通知】 H29.11.20 【回答書再提出】 H29.11.20 【委員会審議】 H29.11.22 【結果通知】 H29.11.22	承認 （H29.11.22）	岩保倫 170005

217年度第6回受付 （締切日11月30日12時）	「本学におけるタブレット端末を用いた反転授業導入に向けての基礎研究　―本学学生のタブレット端末(iPad)活用状況および情報活用能力―」	【代表研究者】 木内千晶 【共同研究者】 豊嶋三枝子・大井慈郎・甲斐恭子・齋藤文枝	【受付】 H29.11.21 【迅速倫理審査】 H29.12.13 【倫理審査による指摘事項通知】 H29.12.19 【回答書提出】 H29.12.25 【委員会審議】 H29.12.27 【委員会審議による指摘事項再通知】　H29.12.28 【回答書再提出】 H29.12.28 【結果通知】 H30.1.11	承認 （H30.1.11）	岩保倫 170006
2017年度第7回受付 （締切日12月26日12時）	申請者なし	―	―	―	―
2017年度第8回受付 （締切日1月31日12時）	申請者なし	―	―	―	―
2017年度第9回受付 （締切日2月28日12時）	申請者なし	―	―	―	―

Ⅱ　教育・研究年報

2017 年度　一般教養領域活動報告

1.　領域構成

清水哲郎（教授）、大井慈郎（特任講師）

2.　一般教養領域における教育に関する内容と評価

2017 年度は、清水教授は「探求の基礎」を担当した。本科目は人間の知的営みの基礎となる見方を学習するものであるが、なお検討してよりよい内容にしていく必要がある。

大井特任講師は「情報処理」を担当した。本科目は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。今後自己学習コンテンツをさらに充実させたい。

3.　一般教養領域における研究に関する内容と評価

2017 年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究（A）（課題番号 15H01861 代表者：清水哲郎）の推進を軸に、次のような研究活動を行った。

- 臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発。
- 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発。
- 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナーの開催、医療関係諸団体の臨床倫理研修への協力。日本医師会生命倫理懇談会および厚生労働省人生の最終段階における 医療普及・啓発の在り方に関する検討会における意見具申。
- 研究成果の発表として、著書（共編著）の刊行、専門雑誌における論文発表、学会公募シンポジウムにおける発表等。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

- 科学研究費助成事業 若手研究（B）（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタにおける現地調査（関連してインドネシア大学客員研究員となり、また同大学社会学研究室と共同研究協定を取り交わした）。研究成果の一部は、ジャカルタ郊外の労働者に関する学会発表や招待講演として公表。発表論文が 2017 年度日本都市学会論文賞を受賞。
- 科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 16H03319 代表者：内藤耕）による、インドネシアカラワンにおける農村の変容に関する現地調査。
- 介護予防事業研究（東北大学教員等と協働）にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、来年度より進める高齢者サロンについての研究のための準備作業。

・平成 29 年度復興庁「心の復興」事業「復興を支えた地域住民の想いを活かすプロジェクト」により、宮城県気仙沼市、南三陸町、七ヶ浜町、山元町にて、行政からの情報収集および復興住宅支援員と住民に対する聞き書き。(成果は出版物としてまとめ、地元に還元)。

開学初年次の研究環境おける活動としては、それなりの成果を挙げた。一般教養領域は、各教員の専門領域が様々であり、領域としての研究活動の機会は少ないが、看護学諸領域の研究への協力等、本学の一般教養領域所属教員の能力を活かす方途を探りつつ、次年度以降取り組んでいきたい。

以下論文等

【著書】

1) 清水哲郎: 意思決定プロセスの臨床倫理、本人・家族の意思決定支援, 日本医療社会福祉協会・日本社会福祉士会編, 保健医療ソーシャルワークーアドバンスト実践のためにー,中央法規出版, 2017. 分担執筆(第 3 章第 1 節Ⅲ・Ⅳ) p116-133
2) 清水哲郎, 会田薫子 (共編著):医療・介護のための死生学入門, 東京大学出版会, 2017, 全vii+28 頁; 清水執筆担当:臨床死生学の射程ー「最期まで自分らしく生きる」ためにー,p31-74
3) 本間照雄, 松原久, 大井慈郎他:『支え手になったあの日からー地域をみまもる支援員の語りー』, 2018,宮城県サポートセンター支援事務所.
4) 臨床倫理プロジェクト編, 上手に老い、最期まで自分らしく生きるための心積りノート〔改訂版〕, 2018, 全 64 頁, 岩手保健医療大学 臨床倫理プロジェクト.

【論文】

1) 清水哲郎:人生の最終段階における医療の選択に関する意思決定支援, エンド・オブ・ライフ　ケア　1ー6, 2018.p2-10
2) 大井慈郎:若手教員・研究者の立場よりー東北地方における社会学教育・研究の現状と課題ー, 社会学年報, 2017.p111-114 (依頼原稿)

【学会発表】

1) 清水哲郎:《皆一緒》と《人それぞれ》ー人間における倫理の構造ー,岩手哲学会第51回大会公開講演 (招待), 2017.7.15 岩手大学

2) 清水哲郎:高齢者と家族の意思決定支援ー救急に関するACPと《心積り》ー, 第43回京都医学

会学術集会 シンポジウム「高齢社会における救急医療」(招待シンポジスト), 2017.9.24 京都府医師会館

3) 清水哲郎：包括的な疾患治療とACPの融合―フレイルの進行を視野に入れて―, 第29回日本生命倫理学会大会　公募シンポジウムⅠ「ACPにフレイルの知見を活かす ― よりよい高齢者医療のために」（査読あり）, 2018.12.16－17 宮崎シーガイア

4) 大井慈郎：インドネシア首都圏の拡大プロセス, 日本都市学会第64回大会, 2017.10.28 石巻魚市場（査読あり）

5) 大井慈郎：インドネシア首都圏の拡大と労働者の移動－非正規雇用者に着目して－, 日本社会学会第90回大会, 2017.11.4 東京大学（査読あり）

6) 大井慈郎：郊外工業団地と雇用労働者が形作る東南アジア都市, 東北社会学会研究例会, 2018.1.28 東北大学（招待）

以上

2017 年度　基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

豊嶋三枝子（教授）、竹本由香里（准教授）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、佐藤恵（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学年度であり、基礎領域は看護学概論をはじめ、専門科目として最初に開講する科目が多く、看護学概論（豊嶋教授）、基礎看護援助論（豊嶋教授、竹本准教授）、看護理論（豊嶋教授）、ヘルスアセスメント論、生活援助技術論、早期体験実習、生活援助技術論は、領域内メンバーが分担・共同して講義・演習、実習を担当した。また通年科目としての基礎ゼミナールは、豊嶋教授、竹本准教授、成田助教が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレジュネスを把握し、各科目の教授内容について工夫しながら初年次を終えた。早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価についても、全員が協力して大きな問題なく遂行することができた。早期体験実習は、初年度で他学年もいないため基礎看護学領域教員のみならず、申請内容をふまえ学内全員の教員が担当した。来年度は、学年も増えるため、学内待機教員を要することもあり、担当教員については、配置を見直し、計画する予定である。生活援助実習は、申請どおり今年度に順じて計画する。

以上、開学年次の授業・実習に関しては大きな問題もなく、全員が役割をきちんと遂行し、スムーズに実行できた。

次に、今後 1 年次の基礎領域科目の開講時期等で改善を要する点を 2 点あげる。ひとつは、前期演習科目の「ヘルスアセスメント論」である。形態機能学と並行して教授するため順序性の面で問題がある。形態機能学の理解がほとんど進んでない段階では、ヘルスアセスメントにおけるフィジカルアセスメントの理解に時間を要する。今年度は前期後半に「ヘルスアセスメント論」を設定し、少しでも学生の学習効果をあげようと努力した。そのため今後は､開講時期を形態機能学終了後の 1 年後期に変更する等の改善が必要である。

また、実習時期に関しては、生活援助実習は、冬季で雪の多い時期であり、インフルエンザなどの感染症罹患のリスクが高いこと、悪天候の影響を受けやすいことなどをふまえて今後開講時期の変更について検討が必要である。

3.　基礎看護領域における研究に関する内容と評価

豊嶋教授は、山形県立保健医療大学の菅原京子教授代表、および沼澤さとみ教授代表の科学研究費助成事業における連携研究者としてデータ収集に協力した。佐藤助手は、前職場で手掛けていた研究を学会発表すると共に、修士論文の一部を２つの学会で発表した。佐藤助手は修士論文を英語論文としてまとめている状況であり、今後まとまり次第投稿予定である。また成田助教、佐藤助手が中心となり、領域内メンバーで研究費を出し合い、共同研究に取り組み、その結果を次年度の看護系学会に発表するため抄録を作成し、演題登録を行った。その後論文にまとめ投稿する予定である。その他、メンバーそれぞれ学内

の３つのプロジェクト研究のいずれかに参加し、データ収集等に取り組んでいる。

総括としては、開学年次であり、メンバーは前職が本学準備室から 2 名移行、臨床から 3 名移行のため、継続した研究に取り組める環境に属していなかったこと、および基礎領域は他領域に比較して、開学から即授業、実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要することもあり、研究業績は少なく、十分ではなかった。今後は今年度取り組んだ研究を含め、業績を上げるために努力していきたい。

今年度の研究業績は、著書、論文はなく、学会発表のみで下記のとおりである。

【学会発表】

1) 佐藤恵, 佐藤眞理, 小山田信子, 佐藤喜根子：経腟分娩と帝王切開術の双方に適した出産体験に関する自己評価尺度についての文献検討, 第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月, 仙台市国際センター.

2) Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, Ayumi Sakata, Kiyomi Kumagai, Emiko Takahashi, Maki Oikawa, Mai Hiwatashi, Yoko Abe, Eriko Saito, Prof. Kineko Sato:Development of the Japanese version of the Salmon’s Item List (Rating scale for satisfaction of childbirth experience) for comparing different modes of delivery, The 8th Congress of the International Society for Gender Medicine, 2017 年 9 月, 仙台国際センター.

3) 菅原純子, 菊池宏美, 菅原小百合, 昆千宜, 佐藤恵：地域保健センタースタッフの母乳育児支援の認識と地域連携のための課題, 第 26 回母乳育児シンポジウム, 平成 29 年 8 月, 神戸国際展示場.

4) 遠藤芳子, 竹本由香里, 甲斐恭子：地域に暮らす生涯のある子どもとその家族の災害発生時における連携ニーズ調査, 第 20 回北日本看護学会学術集会, 2017 年 8 月, 山形大学.

5) 菅原京子, 佐藤志保, 井上京子, 後藤順子, 槌谷由美子, 高橋直美, 今野浩之, 遠藤和子, 沼澤さとみ, 安保寛明, 渡邊礼子, 齋藤愛依, 豊嶋三枝子, 前田邦彦, 遠藤恵子：地元住民の砦となる小規模病院等の看護職のキャリア形成－大学との協働によるブレークスルーー, 第 37 回日本看護科学学会学術集会, 2017 年 12 月, 仙台国際センター.

以上

2017 年度　成人看護学領域活動報告

1.　領域構成

石井真紀子（講師）、齋藤史枝（助教）、大﨑真（助手）

2.　成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2017 年度の「基礎ゼミナール」は石井講師と齋藤助教の 2 名がそれぞれのグループを担当した。PBL の基礎となる文献抄読や文献検索、討議、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための技術の修得を支援した。これにより学生の探求心が刺激されやディスカッションやプレゼンテーション能力の向上につながったと考える。また石井が「人間の生涯発達」担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで学生にとって成人看護学概論へとつながる内容であった。齋藤は次年度の看護過程論の講義内容を担当教員とともに検討し、記録用紙の作成や紙上事例の検討を行った。石井は「看護倫理」の担当者間で授業内容や紙上事例の検討を実施した。次年度に向けての準備は整ってきていると考える。

臨地実習に関しては石井講師、齋藤助教、大﨑助手が「早期体験実習」と「生活援助実習」を担当した。緊張を伴う実習環境でいかに学びを得られたかという姿勢で学生と関わった。次年度開講の「療養援助実習Ⅰ」については実習施設の確保と調整を計画的に進めている。再来年度の「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」についても同様に実習施設の確保と実習内容の検討を行っている。実習についても次年度以降の準備性は段階的に整ってきていると考える。

3.　成人看護学領域における研究に関する内容と評価

2017 年度は、齋藤助教が前勤務施設で取り組んだ研究をまとめ、学会で発表した（共著）。

石井講師、齋藤助教がそれぞれ本学のプロジェクト研究を担当し、今後成果を発表する予定である。

総括として、今年度は開学年度ということもあり領域としての研究業績が十分ではなかった。次年度以降はより力を入れて取り組んでいきたい。

以下論文等

【学会発表】

1) 小林由貴子、稲村佳子、齋藤史枝、佐原佑佳、鈴木愛史、中川智子、和田沙智子、小野久実子、斉藤律子、片岡ひとみ、鈴木民夫：小児のライン確保時のシーネ固定による褥瘡予防の取り組み　日本褥瘡学会誌　Vol.19　No.3　p345、2017

2017 年度　老年看護学領域活動報告

1.　領域構成

木内千晶（准教授）

2.　老年看護学における教育に関する内容と評価

1. 基礎ゼミ

10 人の 1 年生に対し、文献検索、グループディスカッション、レポート作成、プレゼンテーション等、大学での学習に必要な学習スキルについて、アクティブラーニング型授業を行った。

学生は上記の学習スキルの基本を理解できたと考える。また、自主的に学ぶ姿勢の必要性を理解できたと考える。10 人のグループ学習においては、積極的に役割を果たす学生とそうで無い学生がいた。今後は、グループ・ダイナミクスを引き出す教授方法について、さらに授業デザインを考えていく必要がある。

2. 人間の生涯発達

1 年生後期 15 コマの講義の内 2 コマ分で、老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について、諸理論を交えて教授した。

今年度は、1 回目が冬休み明け 2 日目、2 回目は実習のため 1 回目から 3 週間の間が空く時間割であったため、成人期からの連続性と、老年期の中での連続性を考慮した講義が必要であった。老年看護学概論の集中講義が 1 回目と 2 回目の間に入ったため、講義内容には重なる部分もあった。今後は、老年看護学概論と同時期の講義のため、学生の学修効果を考慮した授業展開を考えていく必要がある

3.　老年看護学における研究に関する内容と評価

1. 個人・共同研究

個人では､療養病床の看護職のワーク･エンゲイジメントに関する研究に取り組んだ。

他大学の教員と共同で、臨床看護師のバーンアウトに関する研究、病棟看護師の組織風土に関する研究に取り組んだ。その成果を以下の通り学会発表した。

研究成果の発表が学会発表止まりとなっているため、今後は論文として社会に発表していく必要がある。

2. 学内プロジェクト研究

学内の教員メンバーとタブレット端末を用いた反転授業導入に向けての基礎研究に取り組んだ。タブレットを活用した教育を実践している大学 2 校の視察聞き取り調査を実施したほか、本学学生を対象としたタブレット端末（iPad）活用状況および情報活用能力に関する質問紙調査を実施した。

以下論文等

【論文】

1）木内千晶，療養病床に勤務する看護職の職務関与の構造分析，日本農村医学会雑誌，66(1), 9-20，2017.

【学会発表】

1）Yuko TAKAYAMA, Eiko SUZUKI, Atsuko KOBIYAMA, Chiaki KINOUCHI, A Gender-related Comparison of Factors Affecting Burnout Among Japanese Hospital Nurses，International Council of Nurses Congress – Barcelona，2017.

2）木内千晶，鈴木英子，根岸貴子，髙山裕子，柴田滋子，療養病床に勤務する看護職のワーク・エンゲイジメントとパフォーマンスの因果プロセス，日本看護科学学会 第 37 回日本看護科学学会学術集会，2017.

3）Mika TAKANO, Eiko SUZUKI, Yoshiko SERA, Kyoko TAHARA, Chiaki KINOUCHI, Masahiko MISHIMA，Selection of question items for a scale to measure perceptions of nurses of organizational climate in wards，21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference，2018.

以上

2017 年度　母性看護学領域報告書

1.　領域構成

江守陽子(教授)、　大谷良子(助教)

2.　母性看護学における教育に関する内容と評価

母性看護学研究領域では、本学開設と同時に江守教授、大谷助教の２名体制でスタートした。2017 年度は母性看護学領域に関する科目の開講はなかったが、次年度以降の準備として母性看護学実習室の整備、備品・物品購入、次年度以降開講予定の「母性看護学概論」「母性看護援助論」「母性看護技術論」のシラバス、授業・演習の学習内容について検討を進めた。また、1 年次科目の「基礎ゼミナール」「早期体験実習」「生活援助実習」「人間の生涯発達（2 コマ)」を担当した。母性看護学領域の直接の教育は担当していないが、１年生の看護専門科目の学習や学生生活を教員として支援した。次年度以降、当領域の本格的な教育の準備を予定している。

3.　母性看護学における研究に関する内容と評価

研究活動としては、江守教授が前任地で行ってきた研究成果を原著としてまとめた。また、今年度から新たに開始した科研費：「育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係」、学内プロジェクト：「看護学生の地域志向性を高める教育方略の検討－岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査―」については、学内の研究倫理審査を終え、新たな研究フィールドを確保するとともに、順調にデータ収集、分析を進めている。これまでは、各自の研究テーマについての研究を進めてきたが、母性看護学研究領域としての共同研究については、今後検討・準備する予定である。

以下論文等

【論文】

1)　武田三花、小泉仁子、江守陽子
関東地方 2 校の女子学生の生活習慣と隠れ肥満についての探索的研究
日本プライマリ・ケア連合学会誌 40（1)：2～8.　2017

2)　山口慶子、湧水理恵、江守陽子、窪田満
先天代謝異常児と家族の生活の医療社会面および健康関連 QOL の実態
厚生の指標 64（7)：33～44.　2017

3)　Tokoro Kyoko, Ito Yoshiaki, Emori Yoko, Kawaguchi Takayasu
Relationship between Fatigue and Heart Rate Variability in Mothers up to Three Months Postpartum.
MOJ Womens Health 2017, 6(3): 00156.　doi: 10.15406/mojwh.2017.06.00156

4)　齋藤佑見子、古谷　佳由理、涌水理恵、江守陽子
新生児集中治療室（NICU）看護者が抱く子どもの End-of-Life ケアに対する困難感と

その関連要因－「家族とのコミュニケーション」の困難感を軽減する要因の分析―
小児保健研究 77(1)：27-34. 2018

【学会発表】

1) Sachiyo Miyagawa, Atsuko Kawano, Yoko Emori
Relation between sleep disturbances and perinatal outcomes in pregnant women. The 31st ICM Triennial Congress in Toronto, Canada. 2017, June, 18-22, Toronto.

2) 戸部浩美、上別府圭子、江守陽子
アンガーマネージメントプログラムを受講した母親の経験：質的研究
日本家族研究・家族療法学会　第 34 回つくば大会、2017、8.18-20、つくば市

3) 堀江久樹、江守陽子
小児がん経験者の余暇活動と学生時代の部活動に関する一考察　―成人した独身男性を対象とした調査より―
日本レジャー・レクリエーション学会　第 47 回学会大会、2017、12.10、那覇市

2017 年度　小児看護領域活動報告

1.　領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、甲斐恭子（助教）

2.　小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2017 年度は、基礎ゼミをメンバー3 人が担当した。1 年生の学習状況や到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」の科目を濱中教授が責任者として担当した。小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説でき、2 年次の小児看護学概論に繋げられる内容になった。また、今後の科目の講義及び演習内容を検討した。実習場所の確保に向けて、病院施設との折衝し、具体的な学習内容についても検討した。次年度に向けての準備性がある程度高まったと考える。

3.　小児看護学領域における研究に関する内容と評価

2017 年度は、濱中教授が甲南女学院大学、谷川弘治教授代表の科学研究費助成事業における分担研究者として、研究をまとめ、甲斐助教とともに下記のように学会発表した。次年度には論文作成予定である。また本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として、看護倫理における文献レビューおよび看護倫理教育に関して情報収集を行った。

遠藤教授は科学研究費助成事業における挑戦的萌芽研究　遠藤芳子教授代表において、研究をまとめ、下記のように学会発表した。そして、この研究に関連した公開講座に協力者として甲斐助教と共に参加した。また、山形大学の佐藤幸子教授の共同研究者として研究論文を学会誌に発表、および研究を学会で発表した。

そのほかに、メンバーが本学の３つのプロジェクト研究それぞれ担当し、データ収集等に取り組んでおり、今後成果発表する予定にある。

総括として初年次としては活動・研究はある程度できたと考える。次年度以降さらに向上的に取り組んでいきたい。

以下論文等

【論文】

1) 田桑礼子、遠藤芳子：重症心身障害児の母親が障害を受け止めるまでの過程における看護師の役割　北日本看護学会誌　20（2）2018. p37-47

【学会発表】

1) 小林京子、甲斐恭子、濱中喜代、小野鈴奈：小児医療の現場での多職種連携していくために看護師に求められる力　日本小児看護学会第 27 回学術集会講演集　p123、2017　京都国際会館

2) 甲斐恭子、濱中喜代、谷川弘治：特別支援教育担当教員の小児医療現場における協働・連携　日本育療学会第21回学術集会抄録集　p26、2017　ホテルグランヴェール岐山　（岐阜市）

3) 甲斐恭子、濱中喜代、小林京子、小野鈴奈、谷川弘治：小児医療の現場における多職種連携の現状と課題－医療従事者・保育士・教師間のフォーカスグループインタビューから　日本小児保健学会学術集会講演集　p241　2017　大阪国際会議場（大阪市）

4) 村井麻子、遠藤芳子：学童期及び思春期の神経発達障害のある子どもを養育する母親の行動　日本小児看護学会第27回学術集会、2017　京都国際会館

5) 田桑礼子、遠藤芳子：重症心身障害児の母親が障害を受け止めるまでの過程における看護師の役割　第20回北日本看護学会学術集会、2017　山形大学

6) 菅原梨恵、遠藤芳子：先天性疾患を持って生まれた子どもの母親の心配事とそれに対する看護師の援助 第 20 回北日本看護学会学術集会、2017　山形大学

7) 遠藤芳子、竹本由香里、甲斐恭子：地域に暮らす障害のある子どもとその家族の災害発生時における連携ニーズ調査　第20回北日本看護学会学術集会、2017　山形大学

8) 佐藤幸子、塩飽仁、遠藤芳子、佐藤志保：心身症・神経症児の学校や仲間関係における対人関係の困難が高まる場面の検討　第37回日本看護科学学会学術集会、2017　仙台国際センター

以上

2017 年度　精神看護学領域報告書

1.　領域構成

山本勝則（教授）

2.　精神看護学における教育に関する内容と評価

教育活動としては、通年で「基礎ゼミナール」を担当した。休学した学生や健康上の理由により欠席が増えた学生がいた一方、積極的に取り組んだ学生もおり、多様性が目立った。前期は「早期体験実習」、科目責任者として「対人コミュニケーション」、分担者として「早期体験実習」を担当した。後期は、科目責任者として「メンタルヘルス」、および「人間関係」を担当した。また分担者として「人間の生涯発達」を担当した。

全て基礎科目及び専門基礎科目で、全学生が試験に合格したので、専門科目を学ぶ準備が整ったと考える。今後学生の学力差への対応などの課題は残されたものの、開学初年度の取り組みとしては一定の成果を得たものと考える。なお、これらの科目は、精神看護学領域の教育を支える科目でもあり、領域の科目を学ぶ準備も整った。

3.　精神看護学における研究に関する内容と評価

論文投稿、研究費の獲得は行われなかった。学会発表も筆頭の発表は行ってない。共同発表は精神看護領域およびその他の看護領域の研究 15 件を行った。学会活動としては、日本応用心理学会理事、国際交流委員会委員、日本精神保健看護学会の第 27 回大会運営における執行委員、およびシンポジウムの座長を担当した。

学会の共同発表数は多いが、論文や研究費獲得がないので研究活動は不活発であったと言わざるを得ない。学会活動への取り組みは、過不足ない。

以下論文等

【学会発表】

1）大島友美、山本勝則（2017 年 6 月）身体合併症を有する統合失調症患者の自己決定における精神科看護師の支援　日本精神保健看護学会第 27 回大会・総会　プログラム・抄録集 p 136　2017. 6. 25

2）奥山真治郎、山本勝則（2017 年 6 月）精神看護専門看護師が体験する倫理的問題とその対応　日本精神保健看護学会第 27 回大会・総会　プログラム・抄録集 p 141　2017. 6. 25

3）守山洋、河村奈美子、岩本裕一、佐藤史教、緒方浩志、戸田岳志、中村創、伊東健太郎、山本勝則、星幸江（2017 年 6 月）これからの精神看護学におけるシュミレーション教育の発展と課題（ＷＳ）　日本精神保健看護学会第 27 回大会・総会　プログラム・抄録集

p 96　2017. 6. 25

4）大野夏代、山本勝則、岩見喜久子、杉本夕香里、新関幸子（2017 年 8 月）触れるケアはイキイキ働く看護師を育てます　2017(ＷＳ）　日本看護学教育学会第 27 回学術集会　プログラム・講演集、 p 106　2017. 8. 17

5）古都昌子、藤井瑞恵、矢野祐美子、坂東奈穂美、山本勝則、樋之津淳子、勝見真澄、樋口晴美、中村惠子（2017 年 8 月）看護基礎教育の講義に中堅看護師が参画したことによる学生の教育効果　第 1 報―看護過程論初回講義の聴講から―　日本看護学教育学会第 27 回学術集会プログラム・講演集、 p 178　2017. 8. 17

6）藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、坂東奈穂美、山本勝則、樋之津淳子、勝見真澄、樋口晴美、中村惠子（2017 年 8 月）看護基礎教育の講義に中堅看護師が参画したことによる学生の教育効果　第 2 報―援助的人間関係論演習場面の見学から―　日本看護学教育学会第 27 回学術集会プログラム・講演集、 p 179　20178. 17

7）守村洋、伊東健太郎、山本勝則（2017 年 8 月）精神看護学におけるシュミレーション教育の効果と質の向上―ビデオ視聴を導入した模擬患者教育―　日本看護学教育学会第 27 回学術集会プログラム・講演集、 p 259　2017. 8. 18

8）樋之津淳子、藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、中村惠子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美（2017 年 8 月）看護コンソーシアム構築に向けて方策を探る―大学と医療施設のつながりから看護職を支援するために―（インフォーメーション・エクスチェンジ）　第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集、 p 200　2017. 8. 19

9）矢野祐美子、藤井瑞恵、古都昌子、樋之津淳子、中村惠子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美（2017 年 8 月）大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果　第 1 報―直後のクループディスカッションから―　第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集、 p 331　2017. 8. 19

10）古都昌子、藤井瑞恵、矢野祐美子、樋之津淳子、中村惠子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美（2017 年 8 月）大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果　第 2 報―研修 1 か月後の研修参加者によるグループインタビュー結果から―　第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集、 p 332　2017. 8. 19

11）藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、樋之津淳子、中村惠子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美（2017 年 8 月）大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果　第 3 報―　看護師へのインタビューから　第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 332 2017.8.19

12）山崎陽子、山本勝則（2017 年 8 月）精神科身体合併症患者に関する看護師長のマネジメント　第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集、 p 268　2017.8.20

13）大野夏代、山本勝則（2017 年 8 月）病者の心身の苦痛を緩和する看護師のマッサージ（自主企画ＷＳ）　日本応用心理学会第 84 回大会発表論文集、 p 7　2017.8.26

14）坂東奈穂美、藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、樋之津淳子、中村惠子、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美（2017 年 10 月）大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果と期待―看護管理者の観点から―、第 48 回日本看護学会―看護管理―学術集会、（ｐ？）2017.10.19

15）NatsuyoOno, YukikoNiizeki, KatyunoriYamamoto(2018.1) Promotive and Obstructive Factors of Bedside Masseges by Nurses. Program Book p46,21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference. January 11,2018